毎月十日廿五日發行

家庭雜誌

壹冊定價金五錢

明治二十九年五月十日發兌



第七拾七號

口繪＝龜戸神社藤花と堀切花菖蒲
社説＝武士氣質
科學＝四手獸

近藤勇の妻及子　中野三鷹子
花見車　桐酒舍
杜鵑一聲　雨谷一栞庵主人
疑問　一笠庵
伊勢の臺所　松原乾坤
姑の話（下）　A B 子

家政＝患者の食物、乘馬術と育兒術、女の辭令
社交＝流行いろ〳〵
雜錄＝婦人の世界、ゐさき
歌苑＝募集歌

○小兒○はよく肥へて笑ひ顏の愛らしき筈のものなり之れには彼の有名なる肝油の精と次亞燐酸とを配合して飲み易く且つ味ひよく製造したる

スコット乳菓

が最も適當なる食料にして忽ち肉を肥し發育を助くるなり●此の乳菓が滋養分に富むと他に比類なきが故に虛弱なる人々は之れを用ゐて奇効を見べし

特に**虛弱なる婦人**は一度之れを服用せば忽ち健全なる身躰となること疑なし

○咳嗽及風邪○

は病の初めなり、次に來るものは肺の衰弱にして身躰を痩せしむ、最後に彼の恐るべき肺病の萌芽を顯すなり彼の有名なる肝油の精と次亞燐酸の調合物なる**スコット乳菓**は能く咳嗽及風邪を去り肺臟を強くして活力を與ふること實に驚くべし●●●此の乳菓の洪大なる滋養分が**嬰兒、小兒**及虛弱なる母親を益すること實に大にして、其味も至て滋味なれば喜で服用するなり

此の乳菓が精氣を增し滋養分多く最も効驗あるものなるは世界の大醫の舉て說明するところなり

○スコット乳菓の說明書御入用なれば橫濱八十九番日本支那貿易商會へ此の雜誌にて御承知の旨御申越あれば無代價にて呈す



左の大取次所の外各藥舖にて賣捌き居れば御購求ありたし

橫濱境町	友田嘉兵衛
仝境町	鳥居德兵衛
仝太田町	大川佐兵衛
東京本町四丁目	島田久兵衛
仝室町	資生堂
仝本町三丁目	島田忠兵衛
大阪道修町二丁目	小西儀助
仝道修町二丁目	武田長兵衛
仝道修町三丁目	田邊五兵衛
仝道修町二丁目	田畑利兵衛
仝道修町二丁目	福田淸右衛門
仝道修町二丁目	鹽野儀三郎

家庭雜誌

○毎月二回十日廿五日發兌

定價
- 一冊金五錢 地方郵税共 金五錢五厘
- 半年(十二冊)前金五十錢 地方郵税共 金五十六錢
- 一年(廿四冊)同金一圓 地方郵税共 金一圓十二錢

○廣告料一行(廿四字詰一回ニ付)金八錢

○本誌御注文ハ前金爲替向所ハ芝口郵便支局

本社電話番號七十番

發行兼印刷人 吉崎圖吉

編輯人 金子佐平

發行所 東京市京橋區日吉町四番地 家庭雜誌社

明治廿九年五月十日發行
家庭雜誌第七拾七號

目録

口繪
龜戸神社藤花と堀切花菖蒲（寫眞版）

社説
武士氣質……一
加藤肥州制規七ヶ條

科學
四手獸……四
牡丹餅と萩の花

文藝
花見車……桐圃舍　九
杜鵑一聲……雨谷一榮庵主人　一一
疑問……一笠庵　一四

史談
近藤勇の妻及子……中野三鷹子　二一

談叢
伊勢の靈所……松原乾坤　二七

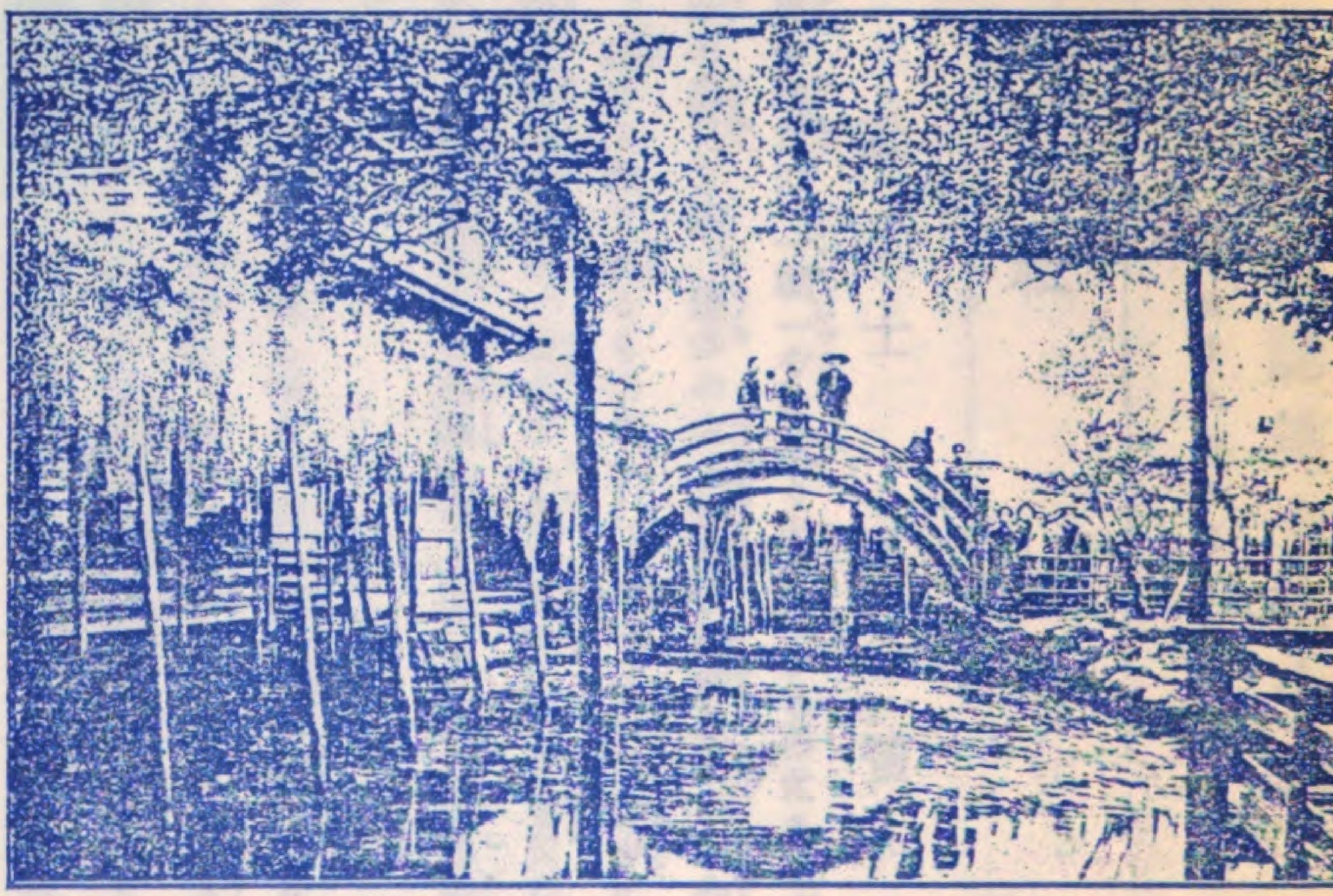
姑の話（下）……ＡＢ子　三〇
長者教の歌

家政
患者の食物……松ヶ枝　三四
乘馬術と育兒術……怨哉　三七
女の辭……ＫＫ　三九
金言二則……同

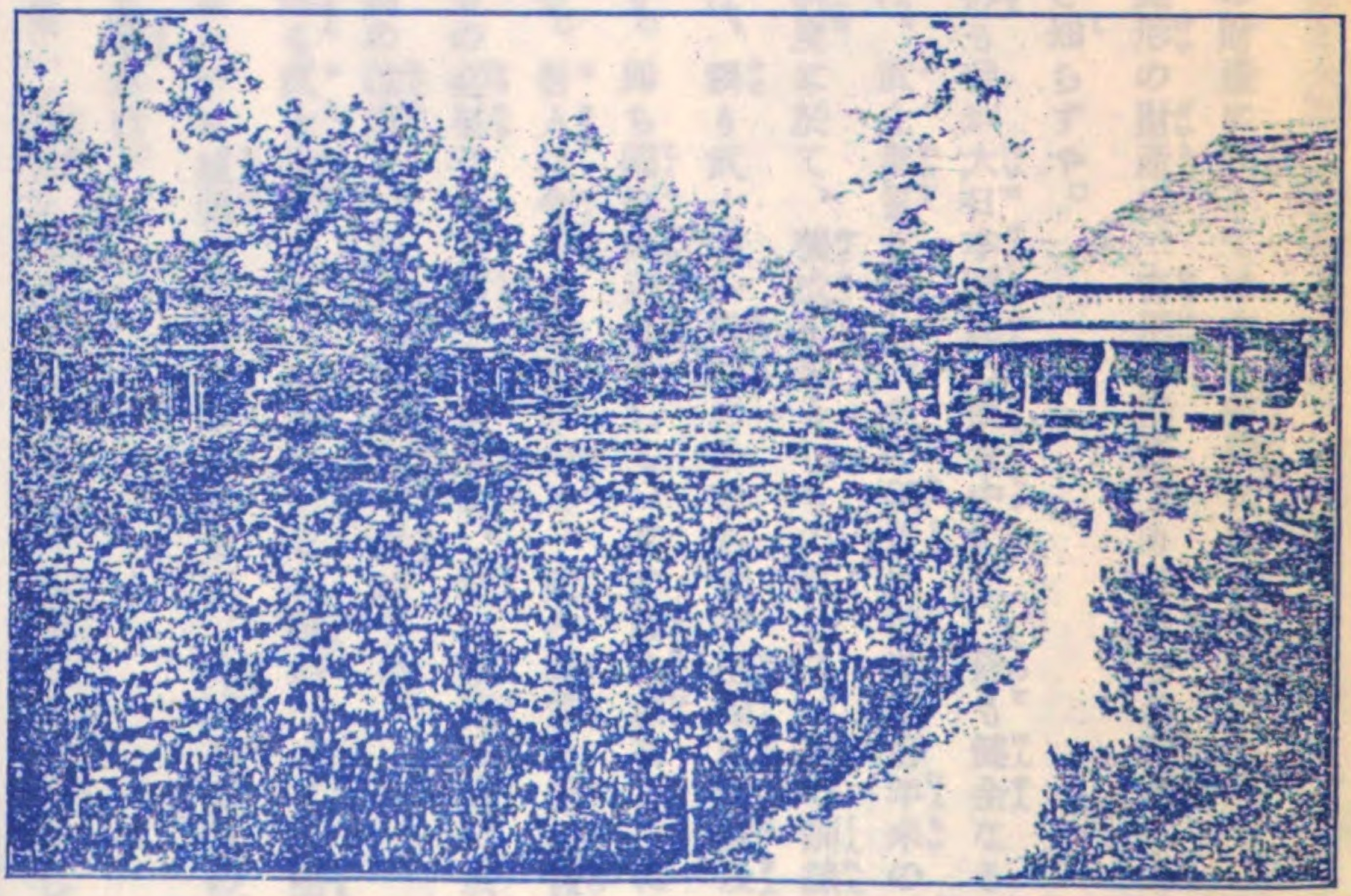
社交
流行の栞……流行子　四〇
流行の單衣……四〇
婦人夏の禮服……四二
夏帶……四二
半襟と夏羽織……四二
西陣織物……四四

雜録
婦人の世界……四五
ゑさき……四七
五月中の植物

歌苑
募集歌數件……四八



龜戸神社藤花



堀切花菖蒲

小川一眞寫眞影刻銅版及印刷

家庭雜誌第七拾七號

(明治廿九年五月十日發兌)

社説

武士氣質

國民の氣質は、一朝一夕に造り出す可きものにあらず。幾多の歳月を經、幾多の大人豪傑の品性氣象の化合して、始めて出て來るものぞかし。例せば太平洋中にある珊瑚島に似たり。幾多の小蟲が累々として層又た層をなし、終に突兀たる島嶼を作り出したるぞ不思議なれ。

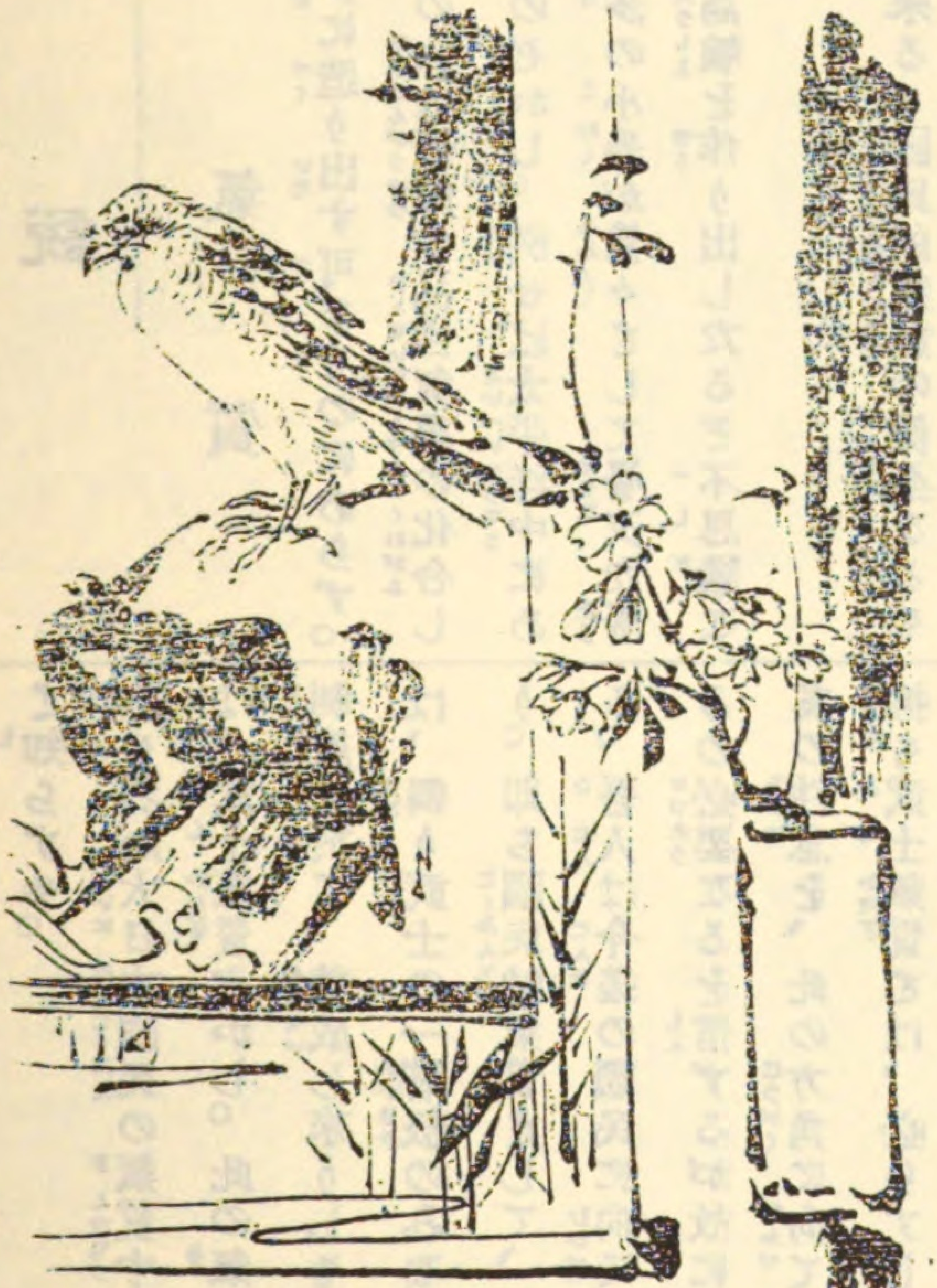
されば前代より遺傳し來る、國民的氣象の健全なるものは、飽迄之を保持し、且つ之を發揚するは、吾人の義務にあらずして何ぞ。金銀珍寶は有形の財産にして、國民的氣象は、無形の財産なり。誰人も先祖傳來の財産を大切に保存し、且つ增殖す可きを知る、獨り無形の財産に到りては之を等閑にするの理あらんや。それ無形の財産は、有形の財産よりも更らに重要なるものと知らずや。

扨も我が大日本國民の氣質中にて、最も健全なるものは、武士氣質ぞかし。此の氣質は特に三百年來の封建制度に於て、養成し來りしものにして、其の訓練の効は、獨り武士の一階級のみならず、全國民に波及したり。即ち國民的氣質として、其の最も重なる一に數らる。吾人は今後の國民に向て、此の氣質を保持發揚するの必要なるを信ずるが故に、特に家庭教育に於て、其の注意を、此の方角に向て促がす也。

抑も武士氣質とは、必らずしも『腹がへりても空腹ふない』と威張るものゝみにあらず、今試みに其の要粹を擧れば。

(第一)面目を重んずるとなり。法律以外道德なしと思

ふ甚には、面目抔と申して、極めてつまらぬ様に心得るれども、そは恥を知らぬ連中にして、沙汰の限りなれば、論外と爲す可し。苟も社會に立ち、人たるの品格を保ち、其の相當の位地を占めんとするには、何よりも先づ面目を重ぜねばならぬぞかし。面目とは社會が己れに對する制裁にして、又た己れが社會に對する制裁也。所謂る武士氣質は。面目の爲めには死をも辭せざる覺悟あり。人は一代名は百代とは此の事ならめ。



(第二)は信義を重んずるなり。かりそめにも空言を吐かず、約束を間違へざるは、信義の初歩也。一諾山よりも重く、一言金鐵より固し、其の志を守り、其の義を重んじ。大節に臨んで奪ふ可らざるは信義の頂上也。

(第三)は忠實なるとなり。忠實とは何事も輕薄がましきとなく、思ふ所を言ひ、言ふ所を行ひ、行ふ所を遂ぐ、而して其の思ふ所は、中心の赤誠より來るとぞかし。忠實とは、他人に對する上のみならず、己れが萬事に處する上に於ても、最も大切なる規法なりとす。

(第四)は勇氣なり。武士は勇氣の化身とも云ふ可きも

のなれば、今更ら説明の要もなけむ。
（第五）は公共心なり。平たく云へば、利己一偏の考へに拠らずして、何事も社會公共の上より打算し、まさかの場合には、己を擲て社會に殉するとなり。
右の細目を一言すれば、總じて武士氣質とは凛々しく、勇ましく、正直に、一筋に、表裏なく、眞面目に、義理強く、恥を知り、之を小にしては一家郷黨の爲め、之を大にしては國家人民の爲めに、盡力奉公する精神を謂ふ也。
されば武士氣質とは、軍人にのみ必要なるにあらず。政治家にも、商人にも、學者にも、技術家にも、凡そ社會にあらん限りの人には、皆な大切なるものぞかし。
而して此の大切なる氣質は、小供の時より知らず覺へず、家庭の教育にて陶冶すると最も大切也。性相ひ近し、習へば相ひ遠し、何事も家庭教育次第にて、千里の差別を生ずるものなれば、世の父母たる人々は、夢にも此の事を忘る可らず。
日本武士の花とも云ふ可き、水戸の藤田東湖先生の如きも、其の父の藤田幽谷先生が幼時に於けるその家庭教育の力多きに居るとは、誰人も知る所ならずや。
虚言を吐くな。男らしくあれ。鷹は餓ても、穗を拾はぬ、男は死しても櫻色、武士氣質の初等教育は、先づ此等より始むることぞ然る可けれ。
斯る教育にて出來上りたる、新人民こそ、天晴れ膨脹的大日本の國民とも申すなれ。

加藤肥州制規七ヶ條

一 奉行の道不レ可ニ油斷一、朝寅刻に起て兵法をつかひ、食を喰ひ弓を射、鐵砲を打ち馬を乘るべし、武士の嗜み能者には別けて加増を可レ遣事

一 慰に出づべしと存し候らば、鷹野、鹿狩、相撲か、やうの儀にて可ニ遊山一事

一 衣類のこと木綿紬の間たるべし、衣類に金銀を費し手前

不レ成旨申すものは可レ爲ニ曲事ニ候、不斷身上相應に武具を嗜み入て可ニ扶持一軍用の時は金銀を可レ遣事

一　平生傍輩づきあひ、客一人亭主の外咄申すまじく候、食は黑飯たるべし、但武藝執行の時は多人數可ニ出合一事。

一　軍禮法侍の可ニ存知一事なり、不レ入事に美麗を好む者可レ爲ニ曲事一

一　亂舞方一圓停止たり、太刀を取れば人を切らんとおもふ、去かる上は萬事は一心の置所より生ずる爲にて候間、武藝の外亂舞稽古の輩可レ加ニ切腹一事

一　學文の事精に入るべし、兵書を讀み、忠孝の心懸專用たるべし、詩聯句歌よむ事停止たり、心に花事風流なる手よわきことを存し候へば、いかにも女のやうに成るものにて候、武士の家に生れてよりは、太刀かたなを取りて死する道本意なり、常々武道の吟味をせざればいさぎよき死は仕にくきものにて候間、よく／＼心を武にきざむこと肝要の事

右の條々晝夜可ニ相守一若右之箇條難レ勤と存輩於レ有レ之者、暇を可レ申、速に遂ニ吟味一男道不レ成者之印を付可ニ追放一事、不レ可レ有レ疑仍如レ件、加藤主計頭淸正在判　侍中

科學

動物

四手獸

何故猿猴は四手獸と稱せらるゝや

人の足に對する彼等の肢の他の趾に對して自在なる拇趾を以て供せられ他の趾も亦長くして手の指に相類似するを以てなり此の殊異の構造あるを以て猿猴の種族は何れも樹木に攀ぢるに輕捷なり然れども直立なる態度をなすは彼等にとりて大なる難儀にてたゞ幾多の經歷馴致の後ち僅かに直立するを得るに至る尻骨盤の骨格狹くして絕へず五躰を直立なる方位に支ゆるに適せざるなり

猿猴の族は凡て兩肢より寧ろ四肢にて歩むを欲す然れども彼等の習性として　只だ些少なる種族の灌

木の生茂せる岩壁に棲息するものあれど樹木の梢枝の間に棲息するを以て彼等の四肢は攫握する手の用をなすものなり

猿猴、無尾猴、狒々の區別は如何なりや

猿猴とは普通猿に與へたる名稱にして凡ての動物中その大約の形狀に於ても亦解剖學上の構格に於ても最も近く人間に類似せるものなり殊に或る獮猴の大なるものに於て最もその然るを見出すなり

猿猴の容貌は甚しく人に類似すれどその低き前額不完全なる鼻突出せる顎は自づから獸類の面相を顯はすなり

多くの猿は上下の顎の兩側に餘計の臼齒を有するあれど多數の猿に於ける齒の定則は人間の殆ど相等し然れども多くの猿の大なる牙は明らかに獸類の特性を示すなり

消化機關は大抵人に類似すれど只だ植物をのみ餌食とする種族に於て胃の構造異なれり猿の餌食は主として果實、穀物、及びその他の植物より成り立てど多數の猿は好んで昆虫或は鳥禽を捕食し殊にその卵子は彼等の大に好賞する處なり

彼等捕はるゝ時は人の飮食する凡てのものを飮食するを學び甘味の食物及び「アルコール」製の飮みものには特更嗜好をあらはすなり

面部と臀の外全身毛を蒙る

多くの猿は頰に大なる嚢を有し急速に嚙み碎きて消耗し能はざる食物を入れ置くなり縱令格外はありとするも彼等は大抵群棲するなり

彼等種族はその伴侶その稚子に對し濃厚なる愛憐の情を抱くなり

產出するは一度に一頭なるとも二頭なるともあり、」

彼等は模倣することに對し著るしき嗜好と才能を顯はし非常なる敏捷を以て精察する彼等の性質と巧計

悪戯を好む傾向とは野に於けるも手飼に於けるも共に甚だ面白き感を與ふるものなり彼等の事を記せる幾多の物語は彼等の理解力の大なるを示めせど未だ犬或は象の如く深く發達せるや否信じ難し彼等の人と著るしき類似及び敏捷なる模倣の力にも關はらず不思議なるは彼等何れの種族中にも人の言語を模倣するの能の見えざる事なり

猿の種族は至て種類多し皆温暖なる氣候の處にのみ見出さる然れども大洋洲及び南海島には絶て產せず

無尾猴とは尾なき猿の名稱なり猿猴、無尾猴等は數千年の昔より印度日本或は亞弗利加の或る種族の間に崇拜せられ嘗て印度セーロンの寺院に無尾猴の齒保存せられし事ありしが信徒の非常なる熱心は絶へず夥多の獻金をなして拜仰し爲めに巨萬の富みをこの寺院に來らせし事あり然れども西暦千五百五十四年ポルトガル人來りて寺院を掠奪し齒をば自國に取り去りたり

狒々も亦猿の種族なれど細長き鼻の鼻端に至りて俄かに尖る處何れの種族にも異なる處なり齒は舊世界に生產する無尾猴猿猴に等しけれど牙の著るしき强力は狒々の特有と知らる

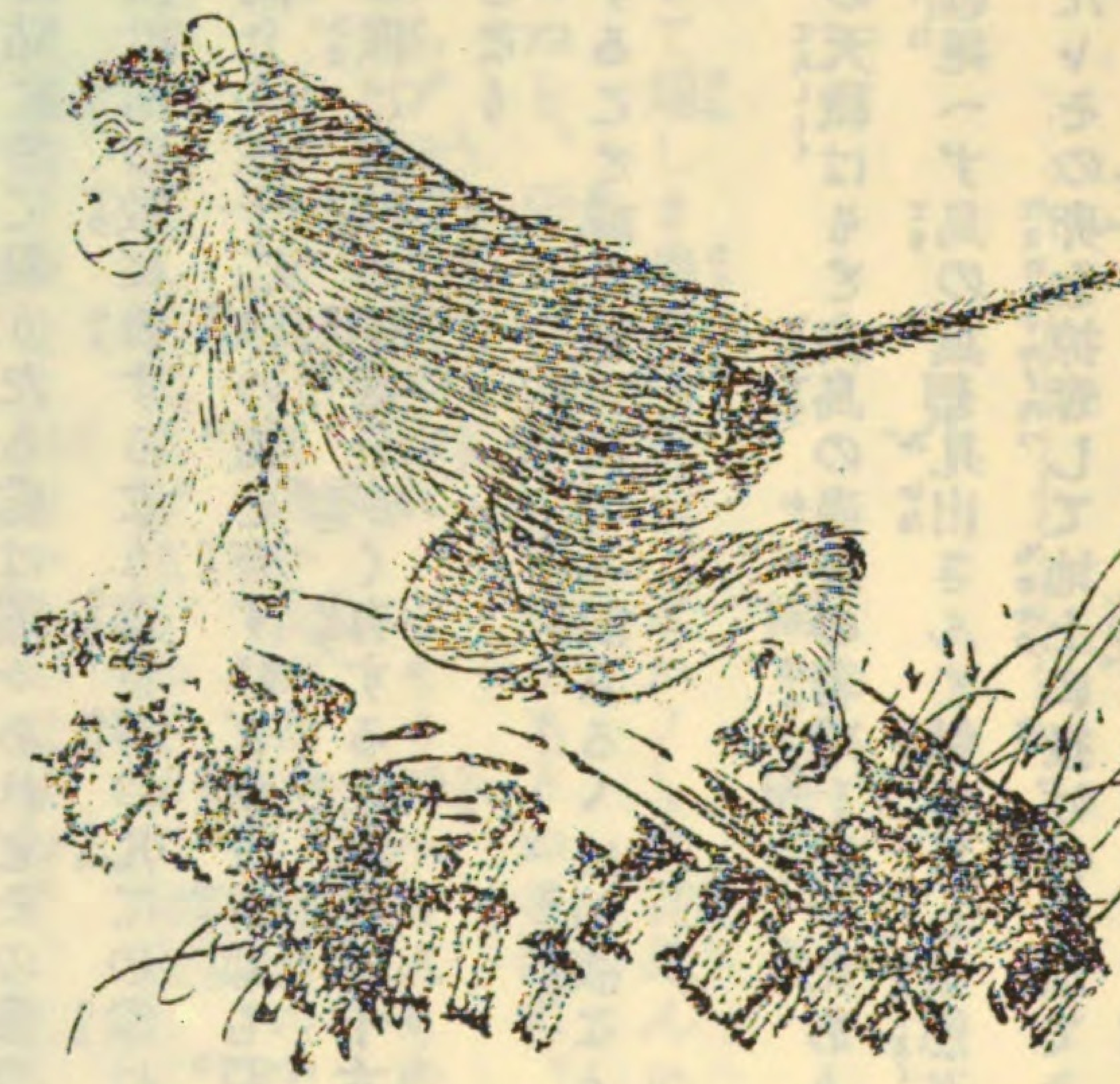
尾は或るものは甚だしく長く或るものは只だ短かき房を持てる結核に過ぎず狒々の相貌は凡て冷淡にして他の猿猴族と全然異なる猛獰なる相を露はすなり

狒々の大なるものはその土地の住民にいたく恐怖せらる殊に群棲する風習あるをもて愈々恐れらるゝなり

前後の脚の工合にて容易に地上を歩み又速かに走るを得れど他の猿猴に等しく樹木を降昇することも至て敏捷なり

彼等の髮に長くして上部は髮の如き觀を呈す彼等は非常に寒氣に感じ易きを以てその生地なる熱帶國よ

り他の風土に携へらるに時は多く長生せじといふ
彼等は性至て狡猾にして悪戯を好み屢々田畑に侵入
しただその作物を食せんが爲めのみならじ何物をも毀破するてふことをたのしむに似たり斯る場合には常に必



ず數個の狒々をして守番せしめ危難の警戒合圖せらるゝや直ちに一齊に逃げ去るなり

狒々は他の猿猴の如く容易に馴致し難し然れども至て幼けき時に捕獲して馴さんはこの限りにあらじ

狒々中最も長き尾を有するものに二種あり一は南亞弗利加に產して豕貌狒々と稱し一はアラビヤ、ピルシヤ及びアビシニヤの山に產して犬貌狒々と稱せらるゝこの犬貌狒々の種族は太古にのみ知られしものと見ゆ埃及古代の石碑上この狒々の形ちを彫刻せらるゝを見ることあり或は屢々木乃伊にせられしと見え今に發見せらるゝことあり

狒々の族にてギニヤの產なる「マンドレル」（毛は至て美はしきも面貌は猿猴の凡の種族中最も醜きもの）と稱するものは最も猛獰なるものにて凡ての動物に恐怖せらるといふ

舊世界の猿猴、新世界の猿猴として二つに區別せらる

るは何故なりや
些細なる點に於て異りたる處は種々あれどその重要なる所以は歯の數に因するなり舊世界の凡ての猴は人間と同じく三十二枚の歯を有すれど新世界即ち亞米利加の猴は四枚の餡歯を多く有する故都合三十六枚となるなり

猿の生産することと或る地方にのみ限らるゝは何故なりや
是れ猿の天職はもと禽鳥の過度の蕃殖を防ぐにあり猿は常に絶へず鳥の巣を見出さんと勉めもし食慾なき時はたゞその卵を掠奪して地上に投げ付け以てその天職を果すなり故に最も多く鳥の蕃殖する氣候の處には最も多く猿猴を見出すなり

猿の模倣する才能を悪戯を好むの天性と相混じて誤解すべからざるは何故なりや
如何なれば猿は悪戯を好む天性あれど又人の眞似して有用なる働きをなすなり然してかゝる有用なる働きを模倣する間彼等の容貌は至て眞面目となることなり

或る猿の著るしき長き尾を有する理由は何故なりや
彼等はその尾を樹にかけて一の梢より他に移るを得しむ或尾は實に攫握の力ありて手の用をなすなり又幼兒は母の背に坐し已が尾を母の尾に捲き付けて以て敵の來襲より逃るゝなり

牡丹餅とおはぎ

ぼた餅は牡丹餅と書けるが正字にて、かのあんをつけたる餅を盆に盛りならべたる形の牡丹花のごとくなれば見たてゝ名をおふせしなり、一名を夜舟といへり、其の意はいつつくやらしらぬといふことなりとの隱語なり、また圓めずに器にもりて、その上に小豆のあんをかけたるを萩の花といふ、女詞にはおはぎとも言へり、これは萩の花に似たればなり、下總の邊にては俗にかい餅といふ、これは餅のうちにてことさらに柔なるをもて、粥餅の訛れるなりといへり

肥前國西彼杵郡深堀村字永九十五番戸某方にて去月二十四日產れし猫兒は四肢身躰は通常にして耳までは一匹前なれど眼口と鼻は二匹前にて而も眼は各二つの瞳子を有し稀代のものなれば或見世物師は三十五圓にて買受けたるよし

文藝

花見車

桐廼舍

今年はわきて嬉しき春に逢ひて、なか／＼に花見んいとまもあらぬを、雨さへしげくてやゝちりぬと聞に、心もやすからず此頃上野の山に、こもり給へる人もゆかしければ、いかでけふはと思ひ直ぬるは、卯月の中のこゝぬかといふあしたなりけり、つとめて起出しにつれなくも、雨はまたふり出ぬいかゞはせむと、しましためらいしが、花をこふる心も雨とゝもにやみがたければ例の小車に身をまかせて出ぬ、道の程はいかゞありしか、ほろひきかつぎたれば得見さりけり、やがて上野にいたりぬればきぬのぬるゝもものかはと、ほろかひやりて見るに、われより先に行し人はわりこやうのものひらきもあへず、袖ぬらしつゝいとほいなげに、かへり行さまのあはれふかしや、不忍の池は雨にかすみて、人の影もうつらず花は地にちりしけど、立まふ蝶も見えずものひさぐべきあき人もいでず、いとふべきせうぎはこゝかしこに、つみかさねたるまゝふるされて、うらみ貌なり、花はさかりに、月はくまなきをのみ、めづるものかはと思ひいるほどに、綾錦つゝみたらむと思ふ御くるまは、皆ひた走りにはしりて、見えずなりぬるを、かたはらいたき心地してなむ

明日はたかうへ野の山の櫻花　ちりての後もとふへかりけり

などひとりごちてことならば、一日は爰にと思へど、

を車をながくとゞめなばひく人や、うからんはた待たまふらん君をとはざるも本意なしとて雲か雪かの中を、はしらせぬ心あらん人は我をもつれなしとこそ見るらめ

なく／＼も身は小車にまかせつゝ
　心ははなにひかれてそ行

泪やそひぬらむいやふりまさる、雨にふたゝびほろ引かつきてしかば、おもひしよりも遠かりけり、からうじてゆきつきぬるものか、家のさまおごそかといふにはあらねど、さすがに心にくうつくりないたまへり、小車とゞむれば女のわらは出て雨がささかざしつゝ、海棠菜の花などおのがまゝに匂へるひなびたる庭のあなたにあないしつ、いと／＼みやびにものし給ひたる、げにつみなふして配所の月を見んてふ、心のそこも見えてをかし、あるじの君がそうそきたまひたるけはひなど、物語に見えたる何がしの君とやいはまほしうなむ

花ゆゑにぬれし袂もかはかなむ
　君かみ袖の香をしうつさは

などされはみつゝ、海に山にあさりもとめられけむ、くさ／＼のをしものにひるけのはしも諸共に、取つるぞ嬉しかりきまたまらうと、おはしぬてはいつくの姫君にや、ゆかしと見れば思ひきや髯黒の大將とも申べきをのこ君なりとは、けふの雨は此人の來たまふにてそよれ、もろこしの文に洞穴より雲をおこし雨ふるとかや、かいたるなへての山にことなる盧山の君なりけりかくて春雨の音も言の葉の花もたかくかをりていよよをやみぬべしともおもほえねば

雲となり雨とふりにし言の葉の
　花さへかをるけふぞ嬉しき

とてあかぬ心を家つとにしてなむ

杜鵑一聲

雨谷一菜庵主人

(上)

吾妻妊身して早や産月といふなり起居も難儀なる樣子の氣にかゝりて「どふだへ過日もお母さんが此方は坐敷も廣ろし靜も靜だから産をするには此方へ來てするがよからふ第一夫婦きりで人手はなし由坊が彼の通りの腕白だから如何する事も出來ないだらふからと云つてゝあつたが見る處餘程太儀らしいから明日あたりから田村町の方へ御神輿を遷してはどふか第一さふすると産婆も近しどれ位好都合か知れない……なァに人なんぞ雇はなくつてもいゝサ實際今日まで自炊の覺はないが人間の出來る事をしやうと思つてせられない事はない筈だ和方が肥立つて歸つて來る迄には自炊學卒業といふので立派な腕前を御覽に入れるよ」と先づ今年四歳になれる長子と共に妻をば其母親の芝田村町に住める方に送りて余は翌日より自炊學の研究に從事する事となれり

余は打明けて申せば一個の辨當官員なり午後五時半と覺しき頃一日の勤務につかれて赤坂なる我家にかへれば戶内は早や薄暗くして常に歸を待つて走せ迎ふる腕白大將の影もなし手探りに彼方此方マッチの所在を求むるに漸く火鉢の挽出しより一箱を得たり去れど手に取れば輕ろしせめて一二本をと振り動すに音なし噫箱は空箱なりけるよ

机の引出より一二本のマッチを得て洋燈に火をうつし火鉢に火を起し手桶に水を汲み鐵瓶の湯のやゝぬるむを待つて茶漬にまで飢へたる腹をこやし机に向ひて其日の新聞を閲しなどして早寐にせんと枕にはつきけれども何となく淋しくて堪らず徒に近邊の笑聲夫婦喧嘩の騷など耳につきて寐つかれず

翌朝になりて常よりは一時間も二時間も早起せんと思ひつる甲斐なく起出でたる頃は學校に通ふ子供の走せ急ぎて「飯村さん待つてらつしやいな」「だつて山田さん遲いんだ事よ八時をうつたつて鈴木さんの叔母がさう云つてましたわ」などいふ聲の耳に入りて驚きぬ今より飛出して車を驅るとも三十分は遲刻すべし到底飯を焚くべき暇はなしとソコ〳〵顔を洗ひ袴の紐結びも敢へず役所へと急げり朝と晝とはパンと玉子とを以て支へぬ其日雨降る役所より歸ればコハ如何に戸棚の中より二三匹の鼠嬉々として走せ出でぬ佃煮も煮豆も散々に荒され牛肉の鑵詰さい狡鼠の爲めに試みられたるの形迹あり薪木とらんとて臺所に出づれば竈より臺所にかけて一面の洪水思はず踏込みし片足の足袋悉く濡れ腐りぬこれ引窓の明放ちたる儘なりしが爲めなりき「噫今から飯を焚くのかな到底こりやア卒業は覺束ない（此外腕白大將の伴ひかへりて面白き飯焚した話あれど先づ後日にゆづる）

（下）

或日役所より歸途田村町に立寄りて樣子を見るに妻は朝來産氣づきて腹を痛め産婆來りて腹をさすり居るといふ去らば一端かへりて隣家に萬事を賴み再び來りて今宵は腕白大將の世話なりとすべしとて走せて赤坂にかへり戸締など注意して夜は隣家の老爺泊りくるゝやうに賴み置き田村町へと引返せり

吾妻は産には餘り苦しまぬ質なりしが今度は何故か尋常ならぬやうにも覺へければ何となく心配なり産兒は男なるか女子なるか男子ならば我名の一字に義と加へんか信を加へんか勇を加へんか女子なりせば歌子……歌代……春江さては花も俗なり露は不吉なり母の名の勝子……女にしてはかゝる名を厭む事とか聞く何と名づけん日は暮れぬ腕白大將腕白の限をつくして眠氣さすまゝに頗る氣むづかし先づ近き邊の勸工場にゆきて玩弄物にても買ひてやらんとすかして愛宕下の勸工場

に入り二品三品氣に入りたりといふを買ふ大將頗る御滿足の躰にて片言ながら背中にありて軍歌を心地よげに歌ふ余も楊子と齒磨を買ふてかへらんとす大將終に余が背に眠る余が望はこれなり大將眠らざれば容易に歸るべくもなかりしなり

「未だか」と問ふ「眠むいなど丶仰しやいますから腰湯をつかはせて上げませう」と產婆は妻の母及下婢と共に立騒ぐ產氣づきてより眠氣などさすは幾分か產婦の異常として厭む處なり隣れる家の女房常陸龍ケ崎觀音は產を守り給ふ由を述べて一軸を持ち來りこれを產婦の枕元に倒にかけて安產あらば正に復して禮拜あれよなどいふ

夜は一時を過ぎたる頃いよ〳〵分娩せる樣子なり余は一間をへだて丶腕白大將と共に臥せり去れど分娩したる樣子はありながら產聲を聞かず「男さんです」「オヤ妙じやァありませんか」「よくこんな事が御座います今にお泣なさいませう」「でも何だか」と母親と產婆との問答氣にかゝりて余は產室に到り見るに產兒は躰格といひ肉といひ色つやといひ頗る充分に發達せる男子なりき唯怪むべきは尋常赤兒の如く手を握りて胞にヒシと抱かず左右ともに投出せるまゝなることなり又泣かんとして泣く能はず何にかむせ入る如く時々グツ〳〵といふ產湯をつかはするに初めて力ある聲を上げて泣く「大丈夫しめたり」と余が思ひたるも寸時「オヤ變だ」と產婆はいふ余は醫師を迎へんとて婢を走らせけるに近き邊の醫師は來れり去れど早や遲かりしなり明日診斷書をつくるべしとの一語を殘してかへる如何に余は落膽せるよ高き鼻しまりたる口元親の慾目には玉の如しとも見ゆるものを浮世の命は一聲の產聲……短命の限りなるべし

翌日區役所よりして埋葬證を得てかへりフト產室に入るに腕白大將はいつしか死せる赤兒を抱き產蓐なる母

の枕元にあり母はこれを見てョヽと泣けり「こら坊やなぜ其赤兒を抱いて來たの和女が言付たんじやァないか泣たつて仕樣がないじやないか唯の躰でもないのに氣をつけなくつちやァいけんね」腕白大將何と思ひてか赤兒を投出して泣けり吾妻も泣けり投げ出されたる赤兒を見て余も一滴の涙禁ずる能はざりし

(勸工場にて買たりし楊子を歸りて直ちに余は用ゐ試みたりしに楊子ホキと折れたり楊子揚子音相通ず思合せて偶然の兆をなせるやなど思ふも迷なるかな迷ひなるかな)

墓地を新に青山に擇びて葬る春老ひて黃鸝何處にか聲を收む櫻花餘香を微風にまかせて花片狼藉たり鐘聲暮靄を穿ちて余のみや響に無常を聞く手から手向くる一枝の樒心を注ぐ一掬の阿伽

　　風折に蕾のまゝよ稚兒櫻

新しき土饅頭には新しき墓標の何となく憐を催ふして逡巡去らんとして未だ去らず杜鵑一聲彼方の空を啼き過ぐるあり　(完)

疑問

一笠庵

山陽鐵道會社の列車は黑烟を吐きつゝ午後四時四十五分神戸驛を發しぬ、乘客此日は至て少なく特に上等列車には三名の西洋人と一名の日本婦人の乘込みたるのみにて時々彼等の間には面白そうに對話の行されたりき、而かもその言葉は英語でなく又不細工な獨逸語にもあらでオー、ウィ、モッシユーとかヌー、バーとか圓滑なる語の聞ゆるを見れば問はずしてその佛語の對話と知られけり、予は神戸驛にて此四人の對話の窓外に洩るゝを聞き友人に對ひ「彼等は佛國人か左もあらねば南米の上等社會の人々ならんと思ふがどうじや」

と云へば友人は「君は何んでそんな鑑定を下すのか兎に角僕の眼でも普通のマーチヤントとは違つてるよふに思ふが……それはそふと西洋人は何處の馬骨か牛骨か知らんがアノ一人の婦人こそ怪しい、彼れは彼奴等のと云ふて……(小指を差延ばし)……ではあるまいか」予はまさかそうではあるまいと思ひ「馬鹿を云ふな西洋人……志かも上等社會の西洋人の妾などが何んであんな日本の……志かも純粹な日本の服裝してるものか」「いや君はそんな外見を見て衣物が日本服だからして西洋人の妾でないと斷言するが夫れは恰も薔薇に刺あるを見て其の花にも亦刺ありと想像する樣なもんだ俗言にも人は見掛けに據らぬものだと言ふではねへか、それを君は只服裝のみで、でないと斷言するのは近頃君に似合はない話だ、兎に角あの婦人がであるかないかは彼等の行く處で譯つてるが、それでは僕等は何處に行つても暑中休暇は遊ぶのだから一つ搜索つてみてやらふではないかと評議一決し、直ぐ樣同じ滊車……しかも其横に列つて居た中等の室に飛び乘つて種々樣々彼れの身の上につきて無用評論批議喋々喃々したる內滊車は兵庫の驛に止まりぬ、予等は彼等が降るや否やを注視したりしが彼等の降りし樣子は見えざりき、予は須磨驛てには多分降るならんと思ひたりき、滊車は兵庫を發し田畝を離れて海岸に至りぬ見渡すかぎり、渺茫として風波靜かなり眼を放てば沖に紀泉の連山淡路の島嶼を望み磯邊に千鳥の飛び來ふ狀態實に得も云はれぬ風景なり稍〻ありて滊車は止りぬ「須磨」「須磨」と呼ぶ驛夫の聲高くその聲の高き丈けそれ丈け降る人も亦多かりき、予等は此驛にては彼等は多分降るならんと思ひ例の列車を注視したりしに果して彼等は一同降りぬ、予等も幸ひ須磨までの切符を買ひたりしかば茲にて降りぬ、予は彼等が一處に降りしを見て失望しぬ讀者も蓋し予が失望せし理由を知り給ふなる

べし、予が友は予の背を叩き「どうだ君僕の眼は寸分過りなしであらうがな」と云つて大驕りに驕りちらしぬ、予は敗けたと思ひ乍らも「君何も彼等は一處に降りる降りんを賭をしたのではあるまい例令ひ一處に彼等が降りたからとて彼等の妾と云ふことは出來ん、それを君は自から勝つたらしう驕つたとてだめだよ、それより暫らく彼等が行く跡に尾いて行つて其の判決を取らん」友人は大笑ひして嗚呼又君は例の負けぬ氣を出して小理屈を云ふが、よし／＼之れから彼奴等の行く處まで行き止まる處にて止まらん」とて兩人其彼等の跡を追ふて行きぬ、西洋人は停車場より降りて直ぐ檬車に乗つて保養院に至りぬ、茲にて例の婦人と暫時休息ひたる後又車を駛せて西の方「ビーチハウスホテル」に到りぬ、されども此ホテルは西洋人のみの旅宿なれば予等は內に入ることを得ざれば殆んど閉口しぬ、友人は斷言して「だうだ君あの位ひ諸方をかけ回りあの位ひ諸事の周旋をしてるのにそれでも君はまだ僕の說を疑ふか、之れから先きはどうしよふもないから君は大抵で僕の說に服し給へ、それで此事件は片付けよふではないか」予は未だ服するの時に非ずと爲し友人に抵抗して「君は彼等の周旋するからして彼の婦人はどうしても彼等の妾であると云ふが、君も亦世事に疎ひ言を云ふものかな、君よ周旋人と妾とは違ふよよし又一歩を讓つて彼の婦人は周旋人であつて彼等の通辯人であるとしてもよい……が譬ひ彼れは通辯位ひして居ても決して妾ではない、その彼れが妾でないと云ふことを僕の證するは彼の婦人には威嚴があつて而して何んだか妾らしふない所がある、友人は飽まで予の言を駁して「君はそんなに小理屈を云ふがまあ君が一歩を讓つた處を見ても君の方に弱みがあると云ふことが分るよ今一歩を讓つたならどうだ僕の說に服さなければならんだろふ……が僕は之れから後は調べるこ

とが出來んから免してやるが、併し何處が好き家を撰んで亭でのこと須磨で今しばらく海水浴でもやらふだないか」予は之れから後調べることが出來んよふになつた處をつけこみて「どうだ君も弱つたらふ僕は決して負けないけれど、それではお互ひに證憑不十分の廉を以て無罪放免としよう」と互ひに相讓り合つて歸らんとしける時、例の婦人は只獨り「ホテル」を出で、須磨に向て車を駛せぬ、予は回復の思ひを爲しぬ友人に向つて「どうだ君！僕の眼光は寸分過りなしだらう君見給へあの婦人は獨りで車に乘つて走つてるぜ」と云ふて車夫を叱し一生懸命に彼れの跡をつけて走らしめんとせしかども車夫は何處まで行つたら好いことやらとつぶやきぬ、予は今車夫の機嫌をそこねては大變なりと思ひ「車屋元氣出してやつて呉れ其代り車賃は幾許でもやる」と云へば車夫は「幾許でも」と云ふ言葉を聞くや直ぐに「旦那御氣遣ひありませぬ」とて大元氣大奮發車は飛ぶが如し。

やがて須磨の町をはづれ四五丁行きたる所にて婦人の車は止りぬ婦人は一軒の藁葺屋に入りぬ予等も車より下り車夫を去らしめ暫時彼れの出で來るや否やを注視しぬ、やがて婦人を乘せて行きたる車夫は歸りぬ去れども婦人は遂に出でざりき、予は「どうだ君も閉口したであらろふ」とて輕く友人をあしらへば友人は「まあ兎も角須磨寺に行つてあそこ等の茶屋の婆さんか誰れかに其の樣子を尋ねて見たら能く譯るだらうよ、其の方針を取らふとの發案に予も大ひに贊成し相携へて共に須磨寺に到りぬ、寺に掛茶屋あり之れ幸ひと「まあおかけやす」と云ふ婆さんの口の下に腰打ちかけ四方八面の話を爲したる後予は婆さんに對つて「婆さん少々物を尋ねたいがお前さんは此近傍のお方かね？」「へーあなた私しは直ぐ此下の須磨のものでをますが近頃此お寺さんへ御參詣なさいます御方が澤山ありま

すさかひ私も其の御蔭を受けよふと存しまして毎日少この菓子を持つて參りますので厶います」「ア、そふかそれでは婆ざん直ぐ此下の藁葺の小チヨツコうした家ねへ、アノそれ道の傍に在る表てに格子の立つてるねい、アノそれ道の傍に在る表てに格子の立つてる内ねい、アの家はどうした家なの」婆さんは予等の問の餘りに突如たるに驚き「あんたさんまあどうなさるんですあんな内のことをなんどお聞きやして」「マ、何んでもよいから敎えてくれ」「それではお話し申しますが實はあの家は歴々の御士族さんでして御一新以前は中々いばりちらかして居られました家ですが御一新以後は種々馴れもせぬ商法などに手を出されまして、それも只一つ何の定まつた御商法ならまだしも好ろしひのですが始めは質屋をしておられましたが質は面倒しひ規則であつて儲けが少ないと云ふので煙草屋を始められましたが之れも面白ふないとて雜貨店に變へられ又酒や醬油の賣買を始められましたが何んにしても馴れぬ御士族の商法のことですから次第に御損計り出來ましてつまり何にも御商法はやめられまして今日では旦那樣はもう六十近ひ御年ですけれど毎日沖へ出られまして御漁が出來ます又奥樣は御内にて近邊の娘の子を集められまして裁縫の先生して居られます、此の樣な次第ですから始めに比べますれば丸で月とすつぽんの樣なもので至つて淋しひ月日を送つて居られます、そしてあなた樣あのお内にはお子樣は一人もありませず」此時予は失望しぬ「婆さんそれではあの御内には一人の子供もないのかねい」「へーそれがあなた樣そふです、とて指折り數へ「へー丁度今から算用してみますと六年以前のことです一人の御子樣……去かも芳野樣とて女子の御子がありましたのですがそのお孃樣は女子に御不似合の學問ずきの御子でして小學校に居られました時も何時も男子に優りて學問がよく出來て居りまし

た、實は私はあの御內へ若い時から御奉公いたして居りましたに依て能く承知して居りますがお孃樣が小學校を卒業なさいました時には學校中での大評番ものでムいまして先生樣などもお內へお出でなされてお孃樣は此度の試驗には凡ての科に百點を得られましたこんなお方は播州廣くとも二人とは在りますまいから私しは郡長の手を經て知事に具申して何か御褒美を戴く手續に致したひ……と云はれたことがありました位です』『そして婆さん知事さまよりの御褒美は何んな品でムゐました？』『あんたさんまア知事さまよりは立派な書面と奇麗な櫻の花に朝日の匂ふて居ます銀の一錢銅位ひの大げさのものが一月ほど後にまいりました』『それから芳野さんはどうした？』『お孃さまはその翌くる年神戸の伯母さまのお世話で神戸ホテルとか申します……あなたさま方はよく〳〵御承知でありましよふが何んでも神戸で一番の大けな宿屋へ小間使ひの樣にして行かれました……旦那樣はそんな所へ御出しなさることは御嫌やでしたけれど何を申しましても御金が有りませんものでムいますに依て充分に學問をさせて御上げなさることが出來ませぬからして其のホテルとか申す宿屋へ御出しなされて朝の間は何んとか申します女學校へ御通ひなさつて晝御膳の後まめ〳〵しふ小間使ひとして働らゐて居られました、しますとあなた樣其の翌々年でした世界を漫遊するとか申しまして西洋人が其の宿屋へとまりまして忽とお孃さまのまめ〳〵しふ働いておいでなさるところに眼がつきまして、此娘はこんなつまらぬ事をさせて月日を送らしては神樣のものをやたらに棄てると同じ樣なものでありますからして是非共連れて歸つて立派な婦人にして日本へ返しますによつてどうか五六年私に預け置いて吳れとの西洋人の話に宿の主人も早速それは大變結構なことゝ思ひ直ぐ樣國元へ御相談に成りました、ところが奧さ

まは大層御心配なされましたけれども旦那様は西洋人の金で學問して日本に歸つて來る位ひ好ひものは無いとて之れ又直ぐ樣御承知なされました、こんなお話合でして遂にその西洋人はお孃樣をお連れない申して西洋へ歸りました、その後うけたまはりましたに何んでも西洋と申すはお金の澤山ある國でヘランスとかフランスとか申しますそふです」「婆さん夫れでそのお孃さまと云ふのは今年でおいくつ位におなりなさるの」「そふですあの時が丁度十三でしたからそれから六年、丁度今年で十九……只今お花盛りの御年です」「婆さんお孃さんは西洋へ行かれてから一度も親元へ御文通はありませんかね」「いや／＼大抵一年に三度か四度かは屹度御手紙がまいりますそして先達て參りました御手紙には何んでも今月頃はお國へおかへりになるとか云ふことが書いてありましたとて旦那樣も奥樣も大層喜んでおいでなさいました、私も暫らくお孃さまに逢ひませぬから一日も早くおかへりになればよいにと毎日々々首を延べて待ています」予は〆たと思ひ友人に對ひ「どうだ君！我儕の眼は寸分違はずであらふが予君も此事實には抵抗することが出來まい」「時に婆さん我們がこんな奇妙なことを尋ねたのも外ではない實は滊車の内に西洋人と一處に乘て居た婦人が須磨で西洋人と別れてあの藁葺の内へは入つたからして妙な家だと思つてお前さんにあの内のいわれを聞いたのだ」婆さんは呆然顏して「へ、へ－何んです、あの内へ若い女が參りましたか、どれお孃さまがおかへりなさつたのではありますまいか、それでは鳥渡行つてまゐります」とて其の邊に居りし子守に店の番を賴んで婆さんは直ぐに小走りに走つて例の屋へ行きぬ、予等は其の間に須磨寺の寶物など見て居たりしが婆さんはやがて急ぎ還つて來て「あなたさま／＼まことにあの御方はお孃さまでした芳野さまでしたアうれしやお孃さまは昨日

神戸にお着きなされてあの神戸ホテルに居られた時丁度お孃さまの行つて居られた西洋の學校の先生であつたお方が六ヶ月以前バリーとか云ふ處を出られ世界を漫遊して居られ例の「ホテル」に宿られて半ヶ年ぶり異なる國にてお孃さまに逢はれてどちらも大層お喜びになつてお孃さまのお勸めで今日須磨にお出でなされ二三日御滯留なさるそふです」「ア丶君僕の眼は全く過つて居た、時に君もふ日が暮れるから何處か須磨の宿屋に行こうぢやァないか」と友人は腰を上げぬ「う丶行かふ婆さん大きにお邪魔」「どういたしまして之れはどふも澤山お茶代を有難ふ頂戴いたします」　(完)

史談

前號には勇の少年時代を揭げぬ、こゝには其妻と子の事を記して讀者の淸覽に供す

近藤勇の妻及子

中野三鷹子

近藤勇が妻といふは、其名を常といひ小普請組松井八十五郎（飯田町中坂上に住し、拾七石三人扶持を頂戴せりと家系に見ゆ）の長女なり容貌や丶醜にして空しく良緣の乏きをかこてり、されとも其才氣は人に後れず人傳につたへ聞きて勇偏に是を迎んへと欲し其由人を以て義母（名は筆）に計らさせしに、義母は先にも云ひしか如く素容色を以て身を立てし藝者のなれの果てなりければ、好んで醜婦を向へんとは何たる馬鹿氣たる事なるぞ、といたくも是を喜はず勇を呼んで言ひけるは何故に御身斯る可咲しき事をばいふぞや、素よりも御身が妻なれば御身の心にさへ叶ひなば、兎や角といふべき筈もなけれども、此處をよく〳〵思ひ見よ、嫁はこれ我が爲の娘なれば逢ふ人ごとにそを引合

せさるべからず、美き子を持てば、親の肩身の廣しといへば、醜婦を嫁に持ちし姑の心人に對して如何にあるべき、そはいはずとも知り得べし、されども是は我身ひとつの事にしあれば、如何にも忍はゞ忍ぶべきも累代つゞきし近藤の家柄にして、かゝる女にあらざれば他に迎ふるものゝあらざりしやなど、善悪なき世の人の口のはにかゝりなば、それこそは一時一身の耻にあらずして先代の名にさへかゝはる事なれば、よく〳〵思ひ辨まへてひらに此縁談思ひ止まるべしと、諭せしも勇は中々に之を聞入れん氣色なく、人の妻を迎ふるは、ゆめ〳〵容色の爲にあらずひたすらに内助を得んが爲なりけり、されば古のさる豪傑も好んで悪女を娶りし事あり、譬へにひくは烏滸なれども我一心は當に是等の人に同じ、義理深き義母が言葉かへし奉るは、いとも〳〵恐あれども却て母上こそよく〳〵ものを辨へ見玉へ、容色は年を經て衰へやすく才智の外に顯むべきものあることなし、殊に又わが家は門人をはじめ人の出入つねに多ければあながちに容色をのみ撰んで妻を娶りなば後に於て其容色の爲め、却つていまはしき事をいはれんも亦知るべからず、願はくは勇が行末をともにし且は當家の世嗣を生ましむべき女なれば、たゞに其醜を以てこれを捨てず我心にまかさしめ玉へよといふは固より理の當然にして返すべき詞もなければ、義母はいと〳〵不與氣に左程思ふことなれば、御身が心に任すべしとて其後は更に何ともいはず、遂に黄道吉日めでたき式を擧げたりしかば、義母と勇との間はこれよりいよ〳〵不和となりもてゆき遂には母のみ獨わかれて四谷船板横町に賃居するにはいたりたり、是決して勇夫婦が義母を虐待せしによりて然りとは思ふべからず、その後ながく〳〵の間絶ず衣食の料を贈りしによりても知るべし、流石劒道の名八として人に知られし、近藤周助もかゝる女を容れて妻とな

せし事ばかり實にや一世の名折といふべし。
其後勇新選組《始は新徴組といひしも後京都に於て新選組と改めしなりそのゆへよしは人も知り且つ玆に何の要もなければそはいはず》に入りて江戸を出でんとするにあたり其妻にむかひていふやう、我此度の西上はもとより生きて歸ると期せず、君に捧げ奉りたる一命輕きことたとへば鴻毛の如しともいはんか、されば我家門を出でん日を以て、頓て忌日と思ひなすべし、去るにても今に到るまで累々と相續きたる近藤家の名蹟叉は天然自心流の劍法、我と共に玆に絶えなんことはいとも〳〵歎かはし、我に於てそを相續さすべき男子なし日頃も常にいひ聞けおきしが如く勇五郎《勇が兄音五郎後に源次郎と改めし人の第三男なり》をむかへとりて娘《名は慶》にめあはせて家を相續なさしむべし若年にして腕いまださへされども、日を積んで勵みなば、上達の望なきにもあらず、されば年來の道場《近年に到りて山岡鐵舟居士撥雲館と名を贈り彌來撥雲館とよぶ》を閉るが如き事あらざるべし、補翼誘導して傳來の家名をはづかしむることなかれ、そは一に御身の負へる務なり夢な忘れ玉ひそよ、遠くば曾我の滿江近くば春日の局の如き古の烈女が心を心として流石は近藤勇昌宜が妻なりけりと、人にもいはれ玉ふべしと、懇々いたらざるところなき夫の言葉を以て女大學とも心得、勇五郎夫婦をたすけて家を治め固く留守をつゝしみ、今日は如何に明日は如何にと流石は愛情の念ひたすらに君居ます西の空のみいと戀しく無事にして歸り來まさんことをのみ、神かけて祈り暮す日のやう〳〵とうつり行くにつれて世の中はいよ〳〵擾々敷なり、もてゆけば、今は江戸の住居も心に叶はぬ節のみ多く打解けてことをはからん門人とても、多くは西上して一人もはか〳〵敷ものなければ、一時世の靜まらんまでとて家を閉ぢて親子三人中野村の片ほとり本

鄕といへる所に、是は勇が日頃ゆきかひて交はり深き成願寺といへる臨濟宗の和尙に賴みて、その門内の茶亭を借りうけ玆に親子三人引移りてさゝやかにこそ日を送れり。

さるほどに伏見に於て勇は或者の狙擊にあひて瘡やゝ重く重任にたへ難しとて、暫くは副長土方歲三に役目をまかせ一旦東歸してその療養をなし、且は其頃病に臥せし父にもまみへ（生父なり生父は勇西上以來病に臥したび〳〵一旦の東歸を促がせしも、京都の事狀は勇の去るを許さゞる旨懇々と書きて其呼かへしを斷はりし宮川家宛會津藩出の書簡いまなほ藏して宮川氏にあり、江戶と故鄕との間に暫くありしがやがて又結束して隊にかへり、一度は土方歲三に任かせたりし釆配をとりて群下を指揮し、東海道を經て江戶に來り、それよりは街道を甲州に入るの折節府中の宿なる六社明神の廣前にて武運長久祈願のため調練の式をなして、明神の法樂に供し、一つは同鄕の人々に見せけることこそ實にや昔會稽山に朱の袂をひるがへせし、人の心に似通ひていともやさしき事にぞありける。

かくて甲州に進み入りしも將倒の危運かへすに難く小佛勝沼などの處々に於て激戰の後は、轉じて奥州に志ざし、流山にまで進みゆきしが玆に所謂官軍の詭計にをちいり勇はとらはれの身となりけり、誠に時の運とはいひながら是偏に勇が人を人とも思はざる豪膽無敵なるのいたすところ土方歲三の諫を用ゐず單騎揚々として官軍の營に赴きしは、實にや千慮の一失勇士勇に倒れしとやいはん歟（此事につきては依田百川氏の譚海あるひは其他の書にくはしく近くは田邊太一氏ものせられし勇が傳に盡されたりよしさなくとも世の人〳〵のよく知れる處なれば詳言せず）

此事を志らすもの丶ありたりければ、妻をはじめ勇五郞はかねて思ひ儲けしも、今更にいとゞ悲しく今日や

斬られたまはんか、明日は仕置にならんと胸のみ痛めてありけるに、いよ／＼明治元年四月二十五日とはなりけり、其日朝とくより或人の來りて今日こそはいよ／＼先生板橋に於て斬れ玉ふとの風潮まことにかまびすしと聞く、妻は今更に歎くとも詮なし、せめては餘所ながら最期の暇乞をもなさんとは思へども我等は女の事なれば、御身我等にかはり行きてよく／＼有様をも見極め來たれといひしかば、勇五郎はとるものもとりあへずして急ぎ板橋に馳せゆきしも、如何んせん世を憚るの身にしあれば唯さりげなく群衆の中に交はりて包めども自からなる涙を押へ、今や／＼と待ち居しにやがて番卒にひかれて來しは其人にあらずして見も知らぬ男なりければ、人の風聞はそら言なりしと心憘しく覺えしに悲しきかな風聞は遂にまことゝなりけり、其後少しの時を經てやゝ正午とも覺しき頃多くの人々各小銃をかたにして前後を警しめ中ほどに竹輿にのせられていできたりしは、これぞ義父なる勇なりさてはいよ／＼斬られ玉ふ事の悲しさよと、むせびつゝ其樣を見てありしに、やがて悠々として竹輿より出でしが見れば戒めの繩目かたく月代は、鬚と共に蓬々として生ひのびたり、掛りの人々にむかひ生前の願何卒かみゆひを呼び玉はれ此儘にてもいと見苦しければ、鬚をも削りたし月代をも淨めてこそ死なんといひしに、人々實にさることよとて、直ちに一人のかみゆひを連れて來りいふがまゝに鬚をそらせ、月代をも淨めたりしかば勇はいとも心よげに打ほゝ笑みて、腮をなで又首すじをなでそれよりはかゝりの人々に挨拶なし、殊に太刀取の人には其禮のことばを述べ、料紙を乞ふて辭世の詩を書しやがて騷ぐ色もなく更に驚く氣色もなく首さしのべて破顔一笑、秋水うしろに閃めけば三寸の呼吸ながくたへたり實にや旭に匂ふ山櫻の花にたとへし大東倭武士の腸玉川の水よりも淸しとい

はんか。

首は首桶に入れて其儘持去り（京都に持ち行きて四條河原にさらし後東山の或處に埋めたり）首なき胴がらはかねて設けられたる坑に埋らる（時にあへば鼠も虎の働をなす實に時にあはざる人の身の上ばかり世にも悲しむべきものなし四條の巷に浪人古高俊吾をとらへ又南海の俊傑阪本龍馬を斬りて關東武士に此人ありと世にうたはれし、新選組の隊長近藤勇昌宣が元なき胴がらは一枚のむしろに蓋はれて道傍の坑に埋められたり。

始終見終りて勇五郎は萎々としてかへり來り、此よし落もなく語りしかば母は身も溶けんばかりなる悲しさをやう／＼に忍びせめては其胴がらなりとも、如何にもして故郷大澤に持ち行き心許の葬ひせんとて、其事を勇五郎にいひ含めたりしかば、勇五郎は其翌る日の夕つかたそが親類の人（宮川彌七とて此人今も壯健なり）及び常に深く交はりしものを呼び來り、我身とも都合四人一挺の竹輿とかごかき四人とを雇ひ來りて、ひそかに彼處に忍び行き種々と手を盡したる後金三兩をそが番人にあたへて昨日埋めし胴がらをほりをこさせ竹輿にのせ（かごかきはいたく驚きしときけり）夜にまぎれて間道より大澤に持かへらんとひた急ぎにこそ急ぎたり。

今は早大澤も程遠からぬ大坂といふ處まで來りしかば玆にて定めの賃金（一人に付一兩）を與へてかごかきを返し、それよりは四人して擔ぎ行き大澤につきしはやがて鷄鳴の時なりけり。

宮川氏代々の墓所にて村の中程にある臨濟宗の草庵龍源寺の裏手なる墓地に陰かに葬むりたり。

されば板橋の宿はづれにたかく立てる碑はこれ唯にその死處の印に止まり、眞に勇が枯骨のあるは白楊風に戰ぐ處尺にも足ぬ卵塔の下なり（塔には新選組隊長

近藤勇昌宜墓孝子勇五郎建とあり》
妻は其時より勇五郎夫婦と共に大澤に來り久太郎新吉などいふ孫の世話をなし、偏になき夫のあとを弔らひ居ますが如くに其墓につかへて年月を送り遂に享年玆に五十六明治二十七年六月某の日を以て世を去りしかば、勇が墓の側に葬むりたり。

勇五郎はひとへに先人の遺跡のたへなんことを歎きてそが道場(撥雲館)を今に保存し耕餘三八の日を以て稽古日と定め醇々として更に敎へて倦ず、されば多くの壯丁南北多摩の村々より集ひ來りて竹刀の音永しなへに絶ず。

勇もし命を全ふして世にありなば或は叙位叙爵の沙汰に預かり、いとも時めき榮へそが繼嗣の君として世に持囃さるべきを僅かに麥飯菜蔬に餓をしのぎ更に世の富を見て羨やむ事なき近藤勇五郎其人こそ幕末の偉人近藤勇昌宜があとたるに於て恥しからぬ人なるべし。

叢談

郭公聞つさかたる人なさへ
又もやくるさまたぬ日そなき　(源三位賴政)

伊勢の臺所(御師の手代の直話)

松原乾坤

諸君は伊勢參宮を爲玉ひしことあるや否、伊勢參宮を爲せし御方は御存じの御師、其の御師の庖厨の事に就て一條の御話を申さん

陽春三月菜種の花の咲く頃より、四月中旬八十八夜の前後に至るまで所謂春分四五十日の間は、一年中の好時節季節も好く日も永く、且つは農事もいまだ忙がしからぬ頃とて、六十餘町の山村僻落の人々所在に名ある神社、佛閣へ參詣の道者、隊を作りて騷ぐが例なり

中にも關西地方に於ては玆、日本一の神様と崇め奉りし伊勢の神宮は天照太神の御廟にてこの世へ産聲揚ると死ぬるまで我々百姓の頭の上を守らせ玉ひ、年中の作物、五穀七菜を豐饒にし、水災、火難、厄病、地震、天地一切もろ〳〵の災厄を攘はせ玉ふ神德の宏大無量なるを感じて此の神廟へ禮參を爲すこと昔時よりの習慣なり其の爲め御參講など〻て一村一鄕、一部落にて講中を結び、年の始めに協議會を開き前年より參詣入費の豫算を立て斯くして一つは崇神の心より一つは物見遊山の心より、遙る〳〵と海山越へて遠く二見が浦に日の出る伊勢へとこそは參るなり。

今ならば手間暇いらず、參宮鐵道に打乘りてヒユーウといふ間に宇治山田の町へ着きパチ〳〵と拍手一つ、夢一の間に百里の山河を蹈み超へて歸るものもあれど併し其れでは折角崇神の主意に違ふのみならず又保養の道にも背く、といふ所より、いそがぬ旅の一日に七八里、名所古跡に惜まぬ道草を喰ひ雨降れば三里步みて次の驛に泊るといふ、極めて寛氣にして且つ陽氣なる道中なり。

扨て其道中筋は樣々にてまづ信州越後の道者は木曾街道を美濃に出で、桑名へ着し、丹波、丹後の人には一まづ京へ出で〻其れより伊賀路にさしか〻り四國の人は多渡津より船にて内海を行き、山陰、山陽兩道の參詣人は岡山にて落ち合ひ大阪へ出で其れより東海道を伊賀路へさしか〻り或は紀伊の高野上り熊野路より行くものあり、何れも春は思ひ立つ人の山をなして山路は花を飾る乘掛馬の引つゞき、里路は車輛の連絡、一村、一部落の道行も打揃ふて三十人五十人の出立なれば伊勢へ入りては同じ御師（宇治山田の參宮旅人宿）へ落着くほどに東國西國、十數ヶ國の人々入亂れて一時に道者の二千人、三千人の落ち合ふは珍らしからぬ事なり。

されば此の大勢の參詣客を一時に引受けて參宮の案內をなし、膳部を供し而かも二の膳三の膳までも供してそれ〳〵賄を爲すこと如何あらん宇治山田の旅宿は如何に繁忙を極め、如何に混雜を極むるならんかは實に想像の外にして、食膳の献立、御客の取扱は蒸氣機關の作用を以て出來るものにあらざれば、是が臺所には定めて二百、三百の人入浸りて朝から晚まで大汗流して働くならんと思ふなるべし、是れ誠に尤の想像にして、何れも一と度び御師に着きたるものは、其取扱いに寸分の拔目なくして一列一帶二千、三千の客へ一樣平等の賄を爲すに感心せざるものなし、然れどもよく其實際を糺せば實に案外至極の事にてその大なる臺所に働らくもの僅かに三十人に過ぎずといふ僅か三十人を以て、二千三千の大客に配當すべき飯を焚き、汁を煮、魚を燒き、膳、椀、皿、小鉢の仕末より持運び給仕に至るまで如何にして是を爲すか、唯不思議といふの外なし、然れども其所が俗に所謂何事も神方便、由來神國の伊勢の御師とて巧みに其方便を使ふなり、まづ其方便の一端をいへば、始めに膳、椀、皿小道具の類は譬へ二千あらうと三千あらふと是れは極まつて道具方三人の受持にて差し出し、第一飯は釜にて焚くといふ事なく二人掛りで洗ひし米を籠に仕掛けて其儘熱湯の中へ浸し見る〳〵飯となして傍らより盛るに五人の受持其手速き事譬へ難し。其れより直ちに汁、燒物を供するに是れ亦雜作もなき事にて大鍋へ沸したる汁の中へ二人の若者薄刃庖丁一挺づゝ持ちて手の掌にて魚、青物を切り込む早業、壺に供する豆腐茹へ物は大半切に入れて鍬にて掻き廻はして晝間二千人前の壺茹へまことに夢のやうになり、次にむづかしからんと思ふ皿の燒物、二千三千の人に供する燒き物然かも燒立を喰はすること誠に不思議なれば、庖厨には定めて照燒き火鉢の五六十もありて大勢かゝりて燒くことな

らんと思ひしに是れも僅か三人にて鼻歌うたひつ埒を明くるとなん其方如何といふに、まづ火の照る火鉢の上に壁塗り鏝十挺ばかりを燒き置き、傍らの大釜に湯沸らせ、方形なる籠に肴の切身二十片づゝ入れてざつとゆであげて長板の上に並べ置き水氣の引くを待ちて順次に右の鏝にて片身交りに撫でゝ尋常燒魚の如くに見せかくるなり萬事此の調子にて二千三千の客の膳部、何の苦もなく埒を明くるとは流石は昔時より大客扱ひに馴れたる御師の内輪の雜作道に依つて賢こき人の直話を其儘に記すこと爾り。

姑の話（下）

ＡＢ子

翌日機會を得て風間剛は、妻の母に打向ひ「お母さん、少し御話したい事がムひます」。

姑は眼鏡の上から婿の顔を一寸覗ひて「御話が、それは何ですか、聞きませう」。

風間は此處ぞ一期の浮沈と身搆へし「實は其の、斯うでムひます、お花が此處へ參りましてからモウ三年になりますが、」

「オヤ、モウ三年でしたね、まあ光陰の立つのは早いもの。妾には三ヶ月の樣な心地がする。偖それから」

「それから」の一語に少々たぢつきながら此機會を逃してはと風間は「モウ三年になります。其三年が間あなたは始終私共と一處に御出下さいましたが」

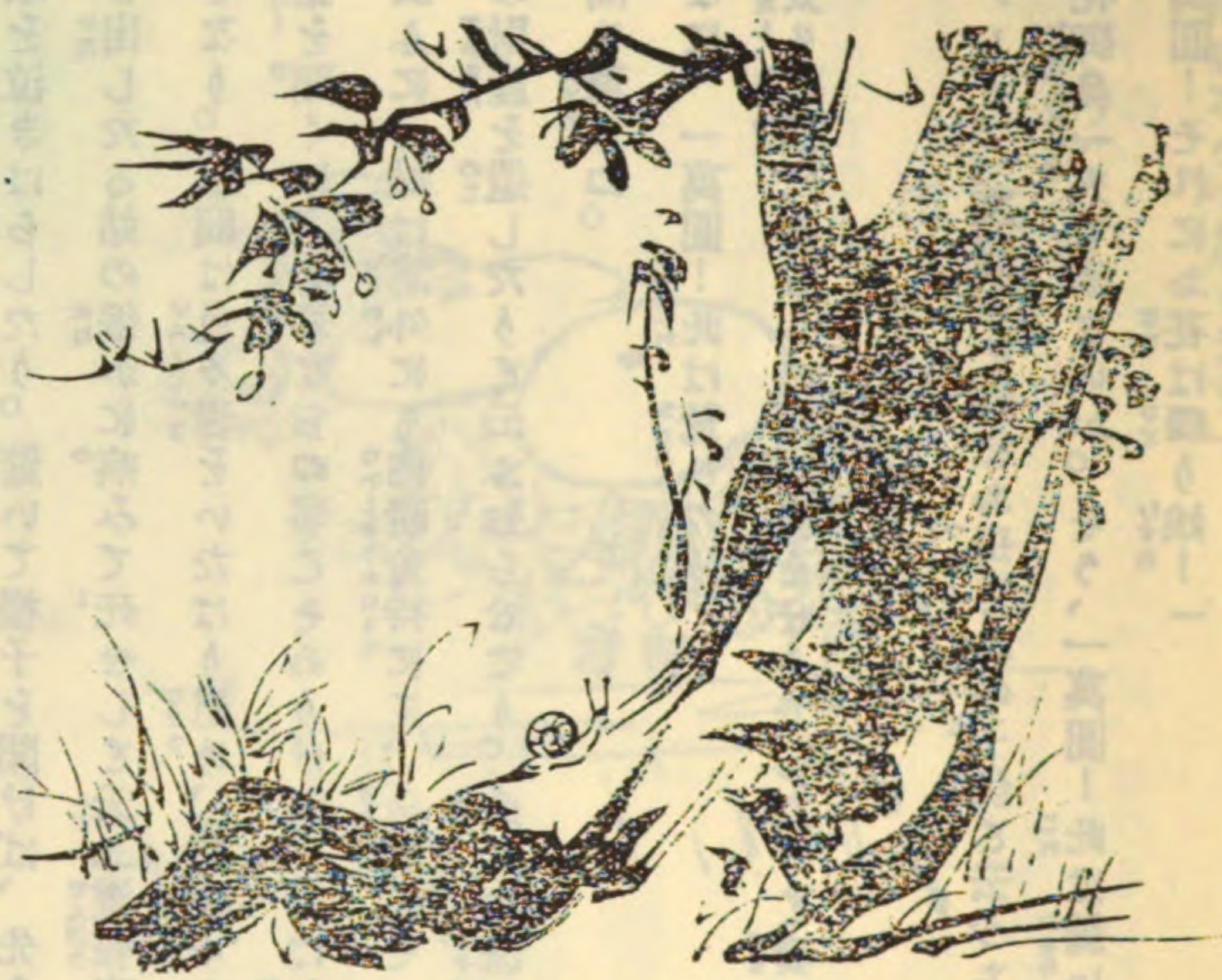
「はあ、其樣ですよ」姑はさりげなく言ひ放つ。

「其處で私、イヤ私共が、實は、實は斯樣決心しましたのです。それは他でもなく、今後は成る可く私共ばかりで生活して見たいと云ふのでムひます」。

姑は勃然たる顔色にて婿の顔見つめ「分かりました。妾を追ひ出さうと云ふのですね」。

「イヤ、其其樣な譯ちやムりませぬが、追ひ出すちや

ムりませぬが、あなたも長い御世話で御草臥れなさいましたでせうから……」。



初夏（蝸牛さ櫻實）

姑は氷の樣に冷やかに「イエ、分かりました。出て行きます。今日出て行きます」。

「イヤ、其樣に御急ぎなさらずとも、一週間か二週間まあ色々御用意なさつてから」。

「イエ、今日から出て行きます」屹として「が、先刻『私共は』と御話でしたが、それでは娘も矢張あなたと同腹ですか」。

姑の鹿爪らしいのが癪に障り「お花は私が妻であつて見ますれば、無論私の處爲は、お花の處爲です」。

「あり難ふ」云つて姑はつか／＼自身の部屋へ立つてしまつた」。

風間剛は大苦戰と覺悟したるに、意外の勝利を得て、少し張合拔したるが、兎に角勝を得て滿足せり。姑は其翌日直ちに出で去りぬ。初めはお花も悄然氣落し、風間も流石に淋しからざるにあらざりしが、其も次第に馴れて、果ては事皆平常に復へりぬ。

＊　＊　＊　＊　＊

三月過ぎて、或日風間會社より歸りけるに、妻のお花は眼を泣きはらしたり。驚いて樣子を聞けば、先きに追ひ出したる姑の俄かに病みて死せしと云ふ電報來りしとなり。風間は色々妻をいたはり慰め、猶樣々と妻の話を聞くに、容易ならぬ事こそありけれ。其は何ぞと云ふに、姑は意外にも內證金持にて、金高凡そ一萬圓の財產を遺したりと云ふ知らせなり。此には流石の風間も驚きぬ。

「なに、一萬圓！此は驚ひた」。

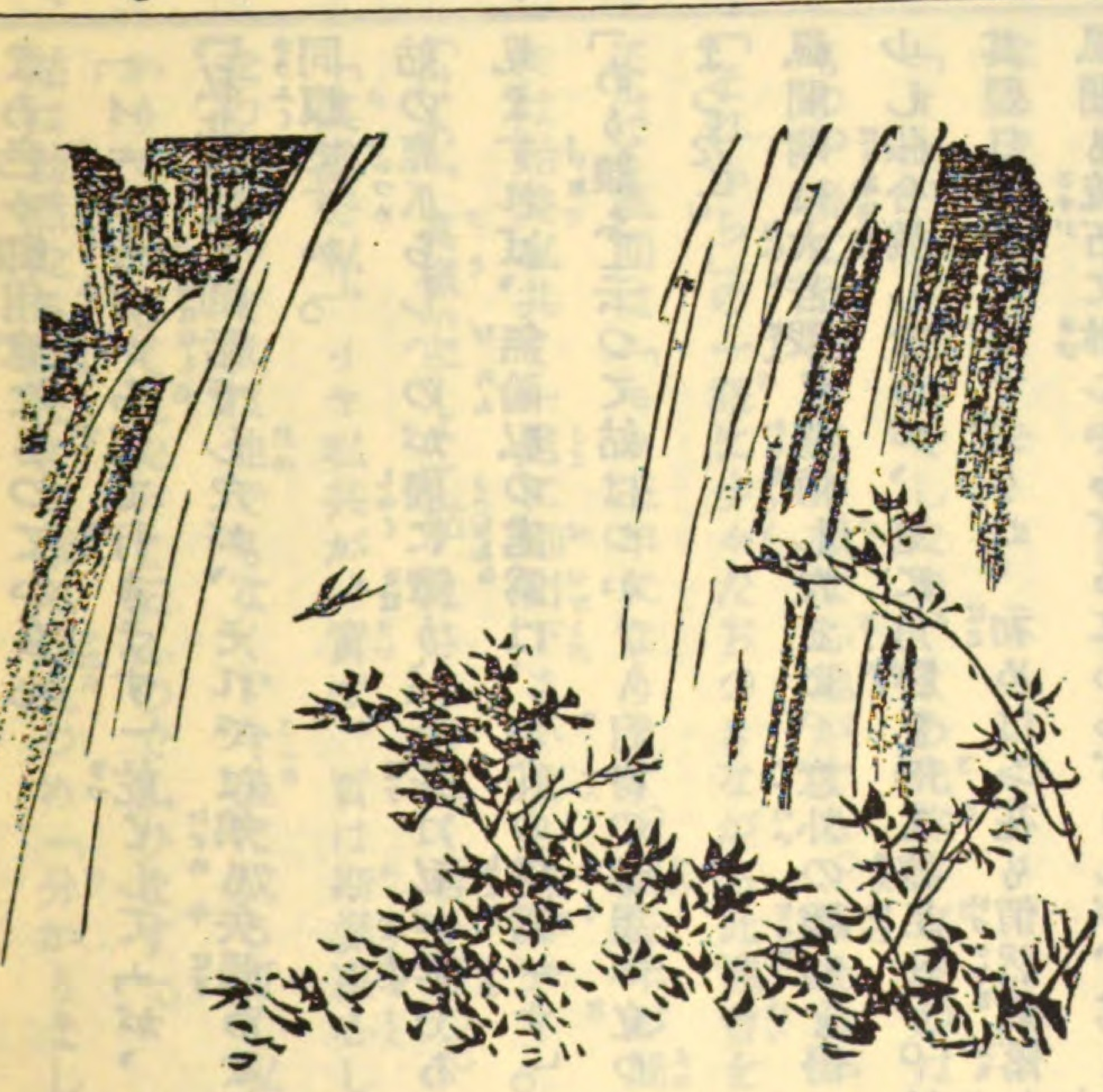
「妾も其樣にあらふとは思ひませんでした」と妻も云ふ。

「フーン、一萬圓！それにお母さんの子供と云つちや、お花御身一人ちやないか。そう、一萬圓！此は驚いた。一萬圓！それにお花は獨り娘！」

と云ひつゝ微笑の唇邊に上るぞ。うたてき人心なりける。

* * * * * *

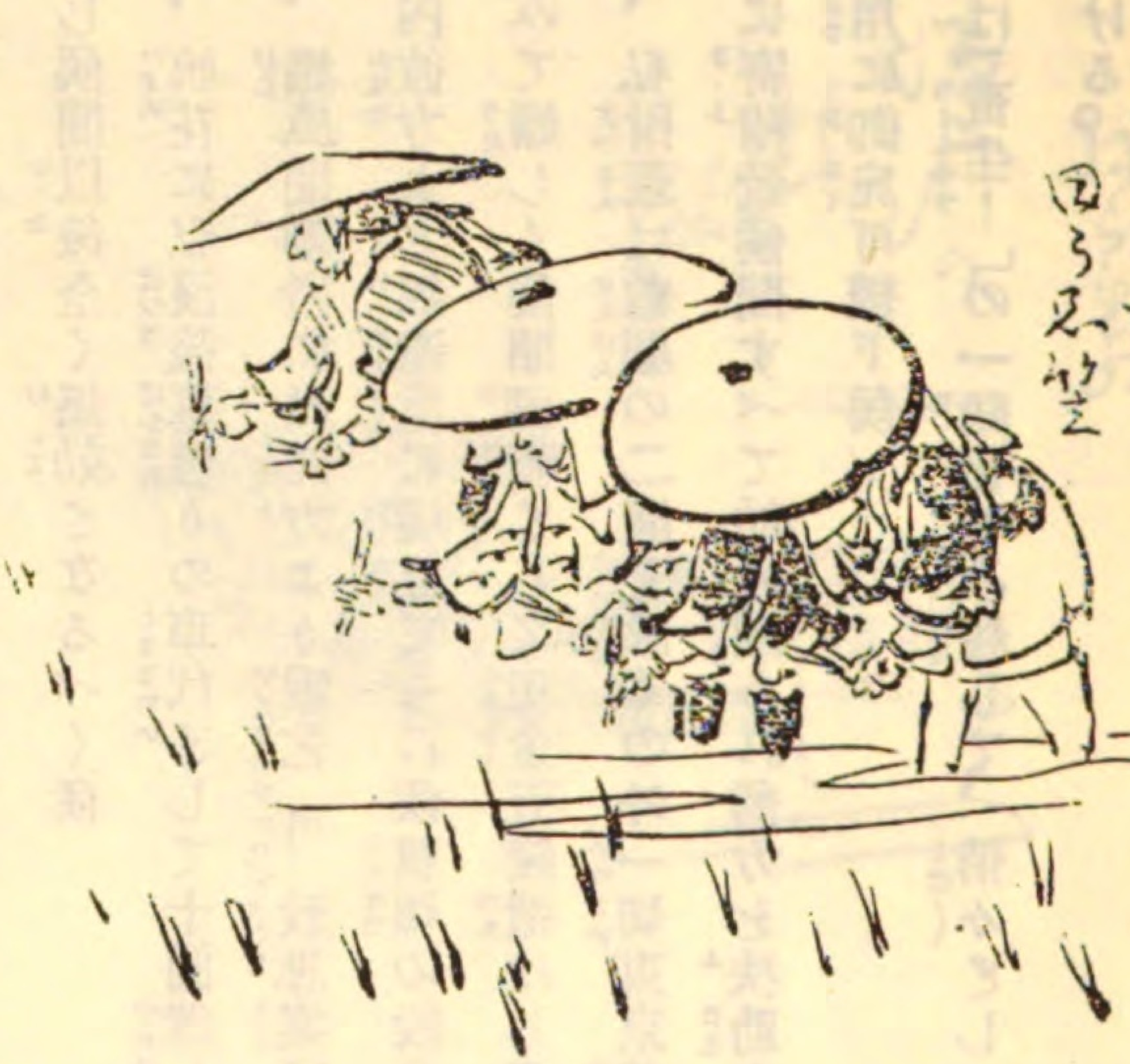
葬式濟みぬ。失せにし人の遺言書を開くとて、風間剛



初夏 (楓若)

を初め親戚の者一同一室に會すれば、公證人先づ其遺

言状を開ひて、「エ、ト、此は明治二十九年〇月〇日の日附になつて居ります」。



初夏（挿苗）

風間剛は口の中「では狸婆奴が出て行く一週間前に書いたのだな。」

公證人は讀み上げぬ。

遺言の事

一、〇〇〇公債　五千圓
一、〇〇〇鐵道株　三千株
一、〇〇〇〇銀行預　二千圓
一、……田畑　〆五町八反六畝二十歩
一、……かし家　一棟

右は私死去の後は婿風間剛娘花へ相讓り候爲後日一札認置候以上

と讀み上ぐる聲の下より、風間剛の顏は崩るゝばかり笑み來りぬ。公證人は猶も別紙を取り上げ、「此處に副書が一通あります。此は二週間後の日附になつて居ます。

風間剛は口の中「では追ひ出されてから一週間後の事だな」。

公證人は讀み上げぬ。

一、先きに認め置き候遺言狀は都合により一切取消し候間以後全く無効となるべく候

一、娘花に私沒後墓參りの車代として十圓遣し候

一、婿風間剛毅には此方より暇乞可致思案致居候內彼方より無遠慮に追立てられ候親切の段身にしみて嬉しく候間御禮として正金五錢遣はし候

一、私財產は前顯の二廉を除くの外一切東京養老院に寄附致候間すべて姑の困られ候方を扶助する費用に御宛可被下候

風間は「畜生！」の一語を嚙み殺して、悄々として出で去りける。

其後風間は雄辯家談話者の名錚々として其仲間に聞へしも、談一たび義母姑の事に及べば、默然として口を噤みけるとなむ。

長者敎の歌

元祿重寶記

長者山望まば千代と心得て假りにも無常を觀ずべからず」親よりのゆづりは早く失易し我が一力に富をもとめよ」長者山登る麓のみち多し中なる道を直ぐに行くべし」儲けても心のまゝにつかひなば鹽にて淵をうめるなりけり」金銀は神や佛よ主君よおそれ尊み使ふべからず」若きより年終るまで樂むはかれ取ることを案ずべからず」いらぬ物などやすくとも買はずしてよく道に如くものはなし」ねざめにも有得の道を思案せよいたづら思案して入る物を買へ」そんの道おもしろくともさし置て得あることは苦しくもせよ」得つきて榮へぬるともおごるなよ夏あつければ冬のさむけき」

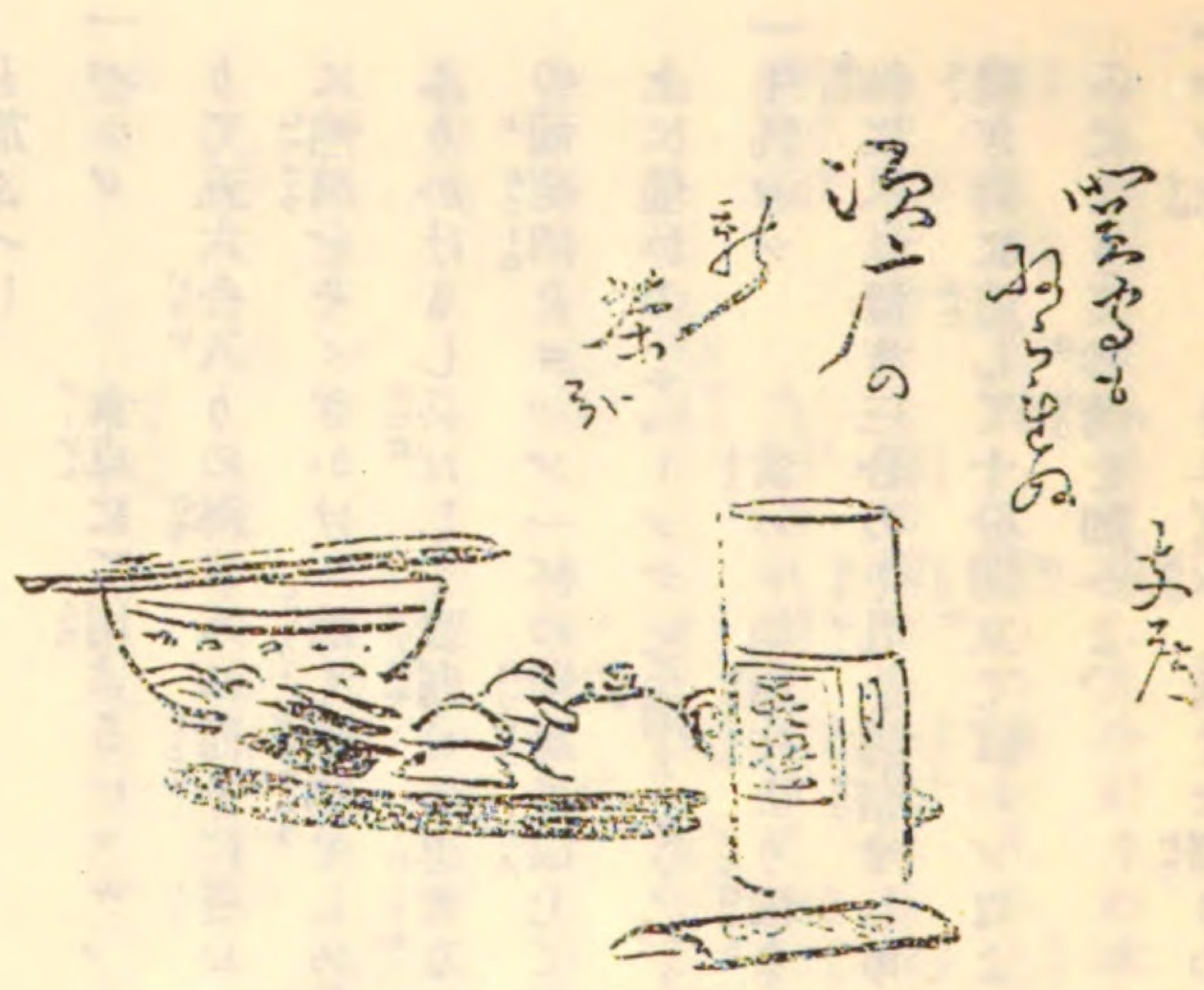
家政

患者の食物

松ヶ枝

病人の食物は最も注意を要するものに候今外國にて患

者に與ふに食物のうち數種を掲げて皆樣の御參考に供し候



初夏（新茶）

おほからす麥（オートメール）粥　大匕に一杯或は二杯のおほからす麥粉をとり冷水にてよく滑かにかき混ぜ食鹽を僅か入れたる三合ほどの熱湯に入れて又かきまぜ一時間乃至二時間靜かにゆる火にかけて煮るべし好みによりてはその後僅少の砂糖を加ふるもよろし

一大麥粥……大麥をよく洗ひコップに半杯ほど取りて六合斗りの冷水に入れ三時間煮るべし清淨なる器にて濾しよき加減に甘美を付け肉豆蔲（ナットメグ）の粉を少し加へて香氣を付くべし

「ナットメグ」は大なる西洋乾物舖にて求め得らるべし

一凝結牛乳……コップに半杯の冷水に大匕一杯の麥粉を溶かし三合の牛乳を鑵か瀬戸物かに入れこれを又湯の入りたる器の中に入れて煮先きの粉を加へ絶へずかき混ぜて十分ほど沸騰せしめ火より取り下ろして「レモン」か「ワ子ラ」（蘭科の植物にて甚だ香氣

よきものなり西洋乾物舗にて小壜のものを求められよ）の液を加へて香氣を付け好みに從て程よく砂糖を加ふべし

一パナダ……食卓にて用ゆるビスケットを二三個とりて五六合入りの鉢に入れ徐々に各ビスケットの上に熱湯をそゝぎかけ悉く膨脹せしめ僅かの砂糖をふりかけもし甚だしく衰弱せる患者ならば大匕一杯の葡萄酒をコップ一杯の熱湯と混じて加ふべしその上に僅かの「ナットメグ」を磨りかくべし

一牛乳パン　食パン⑵扁片より硬き處をとり去り鉢に入れ置き三合の牛乳を沸騰せしめてパンの上に灑ぎ鉢に蓋して十分間立てばパンはよく濕ふなり好みによりて砂糖を加へよ、

一パン水……されば水を飲ませ難きの折に用ゆるものなり以て渇を止むるを得上等の食パン二片ばかりこげざるやう鳶色に炙ぶり清淨なる壺或は甕に入れ六合ほどの水を沸騰せしめてその上にそゝぎかけ冷へるまで靜かになし置き後ち用ゆべし

一ビーフ、テー……脂肪を外したる上等牛肉一斤をとり細々に切りきざみ冷水を以て覆ひ一時間ほどそのまゝになし置き後ち大なる口の壜に入れそれを又冷水を盛りたる鍋に入れ肉より汁の悉く出るまで徐々に二時間ほど煮るべし適宜に鹽を入れて加味せよ

最も衰弱せる患者には左の飲料甚だよろし

一ベーフステーキの最も軟かなるものをとり網わたしの上に載せ遠火にかけて温めレモンの壓搾器を以て汁を搾り上等の葡萄酒一杯にかきまぜ一度に一匕づゝ與ふるやうせば大に衰弱を癒やすに至る

一雞肉羹……二百五十匁の重量ある雞雛は六合の肉羹を作るに足る雞を細かに截り骨を折り六合斗りの冷水をそゝぎて骨より肉の悉く離れ去るまで半時間乃至四十五分とろ火にて穩かに煮ろべしそれを漉し

温湯にて料理せる大麥を大匕一杯入れ一つまみの鹽を加へよ

一ライスジァレー　コップに半分の米をとりよく洗ひ二時間ほど温湯に濕し九合計りの水を加へて糊の如くに米を煮濾して僅かの鹽を入れ上等の砂糖を加へて味を付けよ腸の傷める小兒には殊によろし

一蒸牡蠣　六個の牡蠣を開きて液汁を流出せしめ大匕一杯の熱湯をこの汁に加へ僅少の鹽と胡椒とを加へ五分間沸騰せしめ浮泡を掬ひとり牡蠣を入れ又五分間煮るべし（五分以上に渡らざるやう注意すべし）それにバター一匕を加へよその溶解するや否直ちに火より移して先きに牡蠣を煮居りたるうちに沸騰せしめたる牛乳コップに半杯加ふべし

乘馬術と育兒法

恕　哉

乘馬の術と育兒の法たる其因緣固より遠く、一見何の關係もなきが如しと雖も、乘馬術の神髓に就きて深く研究せば、育兒上應用すべきの道理ありて存す。

予は數年前、或る必要に迫まられて乘馬の術を學理的に講究したりき、其當時刺を通じて教を草刈氏の門に聞く、氏懇ろに予の爲めに御馬の法を說けり、予は其後ち講學の餘暇を得ざりしため、又た遠く馬を郊外に驅るの快を得ること能はざるを以て、遂に充分御馬の法を實習すること能はざりしと雖も、草刈氏の言は今尙ほ耳底に存し、其眞理は萬事に應用し得らるゝを識認するものなり、予が爰に育兒の法に關して乘馬の眞理を說かんと欲する所以のもの、蓋し深く味ふべきの價値あるを信ずるが故なり。

乘馬の術たる、固より生物を取扱ふの法なれば、馬の

性質及び氣象、習慣等によりて種々の方法あるべきは勿論なれども、先づ其術の根本に付きて一言せば、要するに馬の心を識るにあり、又た乘者の心を馬に知らしむるにありと言ふべし、蓋し馬の逸する所以、倦怠する所以のもの、多くは馬の心を計らずして無暗に鞭韃し、呵責し、酷叱するが故に、馬に於ても亦た乘者の心の存する所を知るに困み、遂には反激して、懸け聲に應じて走り、鞭影を見て急ぐことを爲さず、馬は其心の儘に動かんとし、乘者は其意のまゝに使役せんとす、兩々その心相貫通せず、乘者は怒り、馬は激して、遂に統御の法を失ひ、或は奔逸し、或は倦怠し、又た如何とも爲すこと能はざるに至るものなり。

母親たる者が稚兒を養育するの法たる又た斯の如し、幼者の心は老壯者の心と相同じからず、稚兒の愉快とする所のもの、豈に悉く老壯者の愉快ならんや、稚兒の好む所豈に悉く老壯者の好む所ならんや、蓋し其思想及び經驗の程度の異なるがために然るなり、故に母親にして其稚兒を喜ばせんと欲せば、其稚兒の心を心とし、其程度によりて之に接せざる可からざるが如く、要するに母親たるものは、その稚兒の心を知り、又た己れの心を知らしめ、其心兩々相通じて以て始めて育兒の法其宜しきを得べきなり、然らざれば稚兒たる者、恰も馬の奔逸するが如く、倦怠するが如く、心ひがみ、考へ曲り、遂には正統に發達すべき可憐の稚兒をして、爲めに將來望み尠なきものたらしむるに至る、必竟これ皆な育兒其法を得ざるに基因す、故に予は言はんと欲す育兒の法たる千差萬別、固より一律なる能はずと雖も、要は先づ其心を知るにあり、併せて其心を知らしむるにあり、弱きを補ひ、曲れるをため、怒れるを靜め、悲めるを慰むる等、平生其心を知るにあらざれば能はざるなり、これ或は母親たる者の夙に知り給ふ所なるべしと思考すれども、乘馬の術に就きて感ずる

こと深ければ、一言して見を持てる母達の參考に供す
ること斯の如し。

女の癖

K K

女の癖もさま〴〵あるが中に別けて人つき合に不都合なるはとて、或人の數へしを見るに、

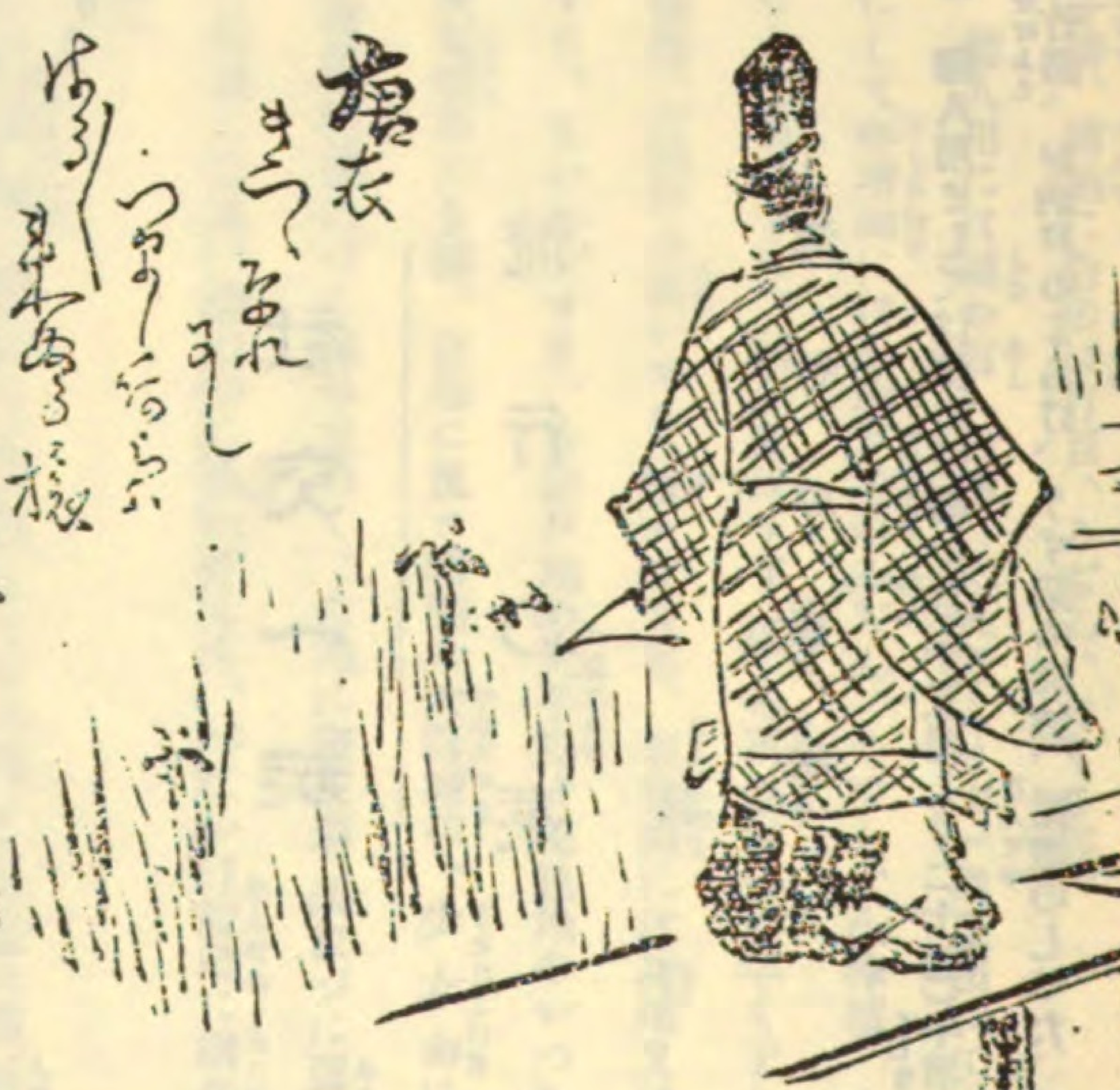
第一、女は兎角吾氣儘をとげる爲めに人の不便不都合を醸しても何とも思はぬ癖あり。此は別けて年若の婦人に多し。

第二、來客なんどある時にも、兎角急に出て來ぬ癖あり。此は左まで年若ならぬ婦人に多し。

第三、人と話するに、相手の言葉まだ終らぬ内に此方より發言したがる癖あり。是は何れの婦人にも多し。

第四、約束を大事にせぬ癖あり。此は却て忙しからぬ婦人に多し。

苦き言なれど、服膺す可き價あらん。



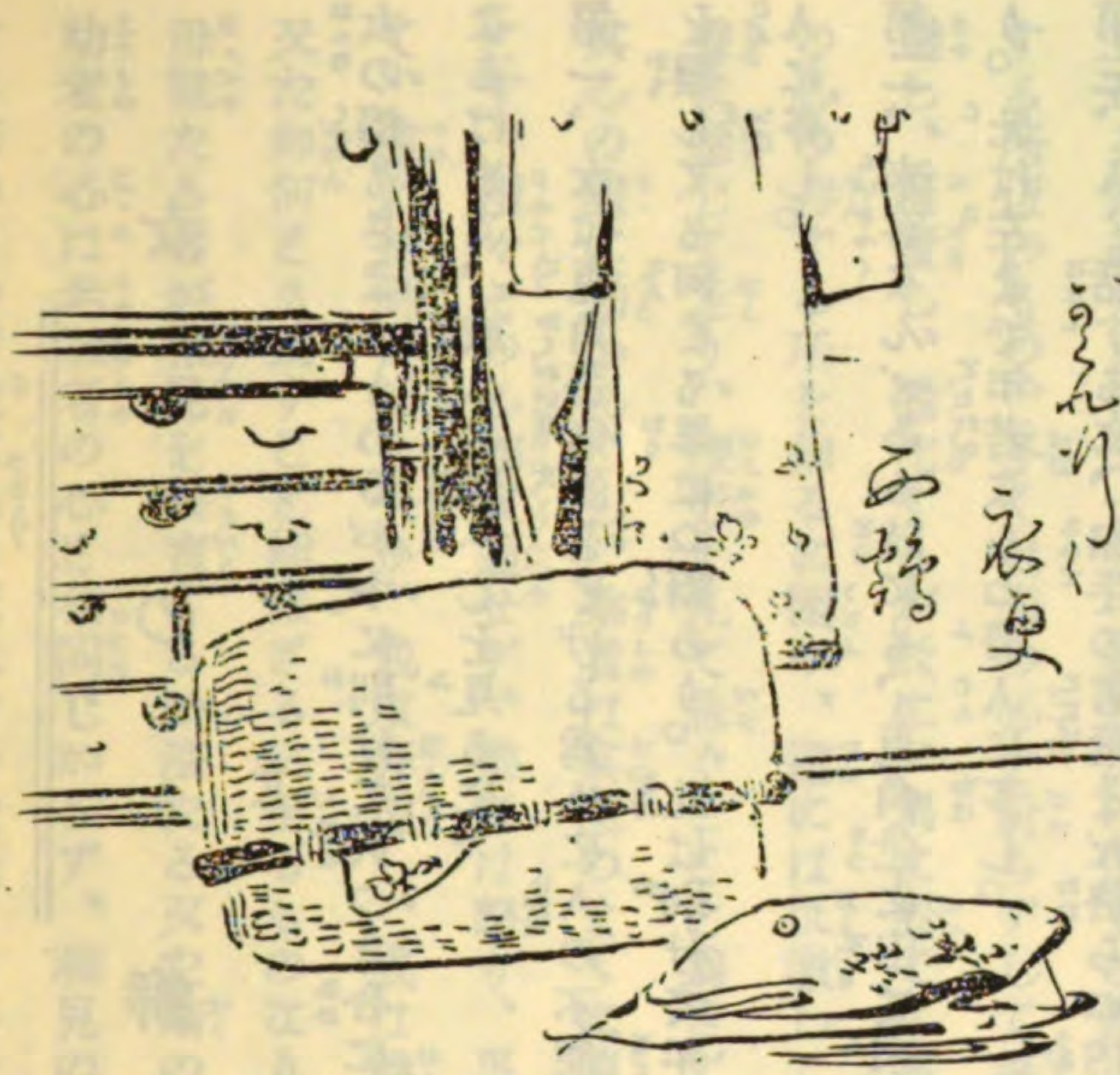
初夏（八橋）

金言一則

西哲の言に『寺參りして麵麭を焦さんより甘き麵麭を燒くが却て本當の宗敎心』と云ふものなり、世人は兎角

物とも思はぬ癖あれども清潔健全にして秩序整然たる家庭てふものは是れぞ眞に實際の宗敎なりと云へり。

家庭の調子を高ふせむとならば、洗濯料理などにも、



初夏　（衣更）

此心なくては叶はぬことなり。

また『閑なる時ほど仕事の出來ぬ時はなし』と云ふことあり。平生事に追はれて忙はしく〳〵と呟やく主婦は、此金言の意味を咀嚼けて、忙はしき内の閑を見出す可きなり。

社交一斑

流行の栞

流行子

流行の單衣

（第一）　婦人用としては例の紋織お召（十五圓より二十圓）年增向には淡小豆の竹節、お納戸のよろけ、うす紫の海綿、紺鐵のしつた、花いろのなまこ、貴族ねづみの網目、黑地の二の字かすり、淡お納戸のわり山椒、等、新造向には淡花地に藤の立わくに菊、淡お納戸に菊水、おなんど、紫根、紺地等の矢がすり、淡紫に立わくに縞多櫻、淡花に横波に八重

櫻、お納戸地に絽目のかすみ、淡お納戸に伊豫染形、黒地に山形つなぎ等、少女向には幽禪縮緬(十圓より十二圓)なるが無論これは紅の入らぬ淡泊なるものと知るべし、形は淡ねづ地におぼろの松、鳩羽鼠と白の市升に福壽淡ねづ地に柳燕、紺と白の市升に菊花、白地にかきつばた、



初夏　(源三位頼政)

白地に藤花、白地に破色紙等。

男子用には壁糸織(九圓より十二圓)第一の流行、柄は淡ねづに薩摩すぢ利久鼠の一の字くづし、同じく萬筋、大名、紺地に淡鼠に金とほし、千歳の子持、紺地に白のはけ目、みぢん、とくさ等。

(第二) 婦人用には縞お召(西陣にて九圓より十一圓上州にて五圓より八圓)にして年増向にはお納戸地のみぢん、くずし、小棒縞、さつま筋にかすり大名のかすり、利久又はうす鼠の萬筋、一の字くずし、蛮播子、其他紺、お納戸の雨かすり、蚊かすり等、新造向には紺地又はお納戸の矢かすり、ちかゐかすり、お納戸地の大子持、花色地のかつをしま、銀ねづ及紫根のたき縞、白地に鼠と鳩羽の大薩摩等、少女向には絽の幽禪(十圓前後)銀ねづに藤の立わく、白地に晝夜菊、淡ねづに蘆にさぎ、淡利久に扇紙に花鳥、銀ねづに亂れざくら、べにかけ段染に網代のふきよせ形等。

男子用には結城紬(縞にて六七圓絣にて七八圓より十五六圓)縞物は紺地に白のはけ目、微でん、萬筋、千筋、大名、小持筋等、絣にて白地の十の字、紺の十の字、二の字、大名に十の字等。

此外は男物に銘線縞(四圓より六圓)相變らずの好評、柄は紺又はお納戸のはけ目、千筋、大名、子持筋、淡利久或は肉色地の萬筋、みぢん、

一の字くづし木賊、之に亞ぐは博多つむぎ（二圓五十錢より三圓）及本塲結城木綿（一圓八十錢より二圓五十錢）瓦斯糸結城（一圓三十錢より二圓五十錢）柄は前記銘線と大差なし、女物にはさつま絣（男物にてもよし、二圓五十錢より七八圓）御所がすり（二圓前後）久留米絣（同上）筑前又は有松の紺絞り（一圓二十錢より二圓五十錢）等にして夫の紅梅織は相變らず需用者多し、價は二圓五十錢より三圓五十錢位、柄は愈出でゝ愈奇なり、其他種々あれど略す帷子の流行は追つて掲載すべし（以上は白木屋新着の呉服太物類の内最も賣口多く人意に適するものを撰びたり）

婦人夏の禮服

縮緬なれば引返しにして無地の三ツ紋宜しかるべく、其色は令閨向にて淡利久、壁ねづみ、栗鼠、淡葉等、令孃淡鳩羽、銀鼠、裏葉、藍氣鼠等、絽なれば令閨向は矢張無地の紋附にして（色は同上）白れり、又は白絽を襲ね令孃向には前記の色に霞に萩すゝき、波に鵆、遠山かすみ、萩桔梗、水に桔梗、藤、遠山景色の水に鷗、籬に秋草等人意に適すが如し、重ねはさゝ色の絽又は綀（縮緬にて十五圓前後絽にて一襲十二圓より十五圓以上二十圓位）

夏　帶

女物には水あさぎ、鳩羽、あづき、お納戸、肉色、うす葉等の小柳、繻子又は小柳織の飛紋形にして腹合には矢張淡色繻子の片側にお納戸地古代模樣の繡珍を合はすか、若し澁くせんことを好めば、片側を壁チヨロ、又は縮緬にして片側を絽、兩側とも絽にても面白し）の鳩羽、肉色、利久、淡は鼠等の色に月にすゞ、七草、やぶれ搊子に古代菊、水に紅葉等を染め出せしもの（丸帶にて十二圓位絽にて八圓位）

男物には八王子製博多の袋織又は三折、或は單帶にして柄はお納戸、黑無地に限れるが如し、（袋織、三折にて六七圓、單にて三圓前後）

半襟と夏羽織

夏半襟は例の絽縮緬に限る、其柄と地色は紅葉、光琳桐、夏菊、はぎ、すゝき等色は淡葉、水淺黄、鳩羽、壁鼠、栗鼠、銀鼠等（三十五錢より六十錢）

男子夏羽織は無論黑絽（五圓より八圓以上十五圓）の紋附にして五本と七本伯仲の間にあり紋は三所と五所互角の勢なり、大きさは鯨九分より一寸一分、次は絽縮緬（十二圓より二十圓）に紋を三所と五所の無双に染めて兩用の塲合に適せしむること流行す、縞物は博多絽（七八圓）を第一とし市樂（同上）を第二とす、柄は紺地又は利久、濃小豆の大名、萬筋、みぢん、くづし等、平民的ならば銘線（三四圓）の紺地の大名か萬筋或は

綿撰糸(二圓前後)の大名、萬筋

セルとフランネル

目下流行の「セル」及「フランネル」の單衣地といふは、白木屋が市樂及御召の珍柄を撰選して直接に英國に注文したるものにして其色合及柄を記せば左の如し

「セル」――黒の綾地に白の十の字、淡ねづに淺黄の珍大名、紅かけ鼠に白のかはり大名、淡葡萄にさばけ大名(以上四種縞は絹糸にて一反は價六圓八十五錢)貴族鼠に金茶の一の字くづし、濃利久、淡ねづみ、肉色の大名、くづし、鐵いろの羽毛目、焦茶、べにかけ、淡利久の微塵、淺黄鼠、濃茶、淡茶、淡鼠、肉色の小紋、白地、淡鼠の珍小中縞、淡鼠の珍棒縞、白地に淺黄の珍さつま等(以上一反六圓廿五錢)

次に「セル」地にて洋服(脊廣又はモーニング、コート)及夏合羽、角袖形、男女を通す)の流行は、淡鼠に白と黒の亂格子、濃茶、濃肉、濃利久の浮格子、淡あづきに白の二三格子、淡ねづと黒の霜ふり、黒地の霜ふりに珍格子、鼠ねづ、淡ねづ、利久、皮鐵、千歳、白茶等の霜ふりに珍格子等仕立上にて男合羽十二圓位、女合羽十圓前後、脊廣十六圓位、モーニング十八圓位)

「フランネル」――獨乙製と英國製とあれど獨乙製の地質厚く黒味勝なるよりも英國製の薄く強くして縞柄の淡泊なるには如かず、さて英國製の流行柄は前記縞セルと大差なきも少しく趣の異りしものを示せば白



初夏 (藤と牡丹)

地にべに掛の微塵、濃鼠に白の賽格子白地の焦茶のさつま筋、鶯茶に白の大名、青竹地に白の大名、黒地、肉色地の羽毛目、黒地に白のみ

ぢん、其他中縞に至りては夏向きお召の同樣の柄（白地、肉色地の松魚しま、棒縞、亂立の如きもの）と知り玉へ、價は一反四圓三十五錢位獨乙製は三圓七八十錢なりと聞く

絹フランネル——銀鼠の大名、淡小豆の霜降貴族鼠の大名、藍鼠のさぼけ大名、利久の子持、紅がけ鼠の三筋、白地に牛蒡縞、淡鼠にうき糸の絣かすり、其他種々あり價は一反三圓九十錢

仕立代——はセル單衣一枚五十錢、フランネル四十錢、こはいづれもミシン縫なり

西陣の織物

國民新聞特派員葉陽生は左の如く西陣の織物景況を報じぬ、轉載して讀者の一覧に供す

本年西陣夏物の景況を其道の人に問ひ合せ候處其答は左の如くに候

最初生糸下落の爲め例年早仕入各店共一時見合せの姿なりしも時期愈迫りては寸閑なく此頃は競て仕入に着手し隨て品大拂底なり

夏物にて非常に賣れ行能きは明石縮に次で平上布壁上布（但羽織地）紋上布、鴨川縮等弗々賣れ行けり

明石縮、柄は昨年に比して大差なく千筋、萬筋、瀧縞市通、小持、薩摩縞、五二棒、小棒縞、大柄にては白地紅入等大絣縞等なれども本年に入て最も柄受け好きは昨年より初めて織立てたる絽目入りの縞柄にて一見して絽明石の如く元來夏物のことなれば絽目は涼しそうに見へ受けよきは言ふまでもなければ高尚なる縞柄に絽目を織立つれば第一優美にして需用多く先づ先づ是が本年第一の流行柄なりとす色は納戸、吟、白、鼠、鳩羽、紫根等なり直段は上等十圓以上下等八圓位

平上布、大柄絣物等着尺二三年前迄は隨分賣行きありしが保方あしき爲需用少く反て其保方著しき明石縮に一倍の勢力を讓りたるもの丶如し只賣行くは市樂、市崩等小柄物の男用羽織に賣行きポツポツあり直段は着尺にて明石同格

壁上布、着尺は一切賣行なし品柄地にて千筋、萬筋、兒手等の小柄物、男用の羽織に賣行けり直段六圓内外

梅田織、專賣特許の品にて地質堅牢にして紋立高尚なり特に夏もの等肌觸よく汗彈き善きとの特色に因り素人の受けよく十分賣行の見込あり用方は羽織（染地）縞物等あり又從來絽の代用には保方大に優て其紋立も同樣にて伸縮の憂なく大に受よし其他鴨川縮、紋上布等もポツ〳〵賣行あり直段紋上布十圓以上、鴨川七八圓位

絽にて夏物は西陣特有の妙所あり地質と云ひ柄及色の配合等彌榮ある處に尙ほ進歩を圖りつ丶あり

雜録

婦人の世界

○亞弗利加の勇婦　亞弗利加の東なるアビシニアは近來伊太利國と戰爭を始め、半開國の名あるに拘はらず、先日已に伊太利軍と戰ふて大に之を破り、其勢非常にて歐洲人の膽を冷さしめたるが、同國王メテレク二世の后は珍らしき氣丈の婦人なりと云ふ。其名はタイトウとて、之を譯けば「イシオピアの光」と云ふ意味にて、容貌美麗、勇氣凛々、平生國家重大の問題は國王必ず之を后にはかり、后自から緊要なる勅諭布令等を草したることのよし〱なり。酒を好みてシャンパンを嗜み、尙武の氣風いと盛にて、已に此間の伊太利軍との大戰にも、自から近衛の一隊を引率して敵に馳せ向はんとしたる程にて、朝鮮の故閔后、支那の西太后等にも比す可き力量者なりと云ふ。

○米國の女富豪　世に珍らしき婦人も少なからざれど北米南テキサス州のキング夫人には寡婦位著しき人は少なからむ。其所有支配する地所は百廿五萬エークルとて我五十何萬町に當り、其サンタ、ゲルツルヂスてふ所に有する牛馬遊牧所は世界第一にして、カルヂスクリスナ灣に瀕する四十哩、濶其上に垣を繞らすこと三百哩。夫人の私宅の戶口より表門までは十三哩ありて、何處へ向ひても一直線に六十五哩が間は他人の地を踏まずして通る可し。キング夫人は當時六十歳にして、よく人を使ひ人を憐む。其身代の莫大なるは



當世おじぎの仕方(華族)

遊牧所の牛馬の數のみにて、二十萬頭ありて之を處理する費用は我十八萬圓ばかりを要し、牛の世話方三百人、其使用する馬千二百疋ありと云ふ。此莫大なる資産を、此寡婦一人にて十分に切て廻はすとは、其力量の程思ひやらる。



當世おじぎの仕方(紳士)

○婦人國　露國スモレンスク州に四十哩四方ばかりの地あり。此處は『婦人國』として知られ、一年多くは婦人のみ住みて婦人の治むる土地なり。其を何故と云ふに、此處の男子は年々其時候に到れば、仕事を搜して他郡へ行くことにて、其跡には婦人の町長・村長あり、婦人の町會村會ありて、おの／＼公共の問題を議し、何事も都合よく運びて、財政の手際など中々グラッドストーン氏も三舍を避くるばかりなりとぞ。

○衣服制限會　英國ウオルウイツク伯爵夫人等を初とし、交際社會に名ある婦人等發起となりて、衣服制限會なるものを此頃設けぬ。其規則は一季には晝夜おの／＼衣服は一枚を限りとすと云ふ定めにて、但珠玉自轉車用衣服毛皮等は制外なりと云ふ物數奇千萬なる會なり。此ウオルウイツク伯爵夫人は曾て英國財政困難の時八千圓の毛皮外套を失ひ、其奢侈の爲めに英人の物議を惹起したる人なりと云ふ。されば此衣服制限會も、勤儉博愛の企ならで、また一種の慰に



當世おじぎの仕方(軍人)

過ぎざるならんか。

龜戸神社の藤花と堀切花菖蒲

（口繪のゑとき）

三春の行樂夢の如く去りたる後、直ちに來るものは、曰く牡丹、曰く躑躅、曰く藤花。牡丹は都下に於て本所成文に、躑躅は牛込大久保に、藤花は本所龜戸神社に名を博しぬ。口繪に示せるは龜戸神社の藤花なり、按ずるに同社は府社にして菅原道眞の靈を祭り、又た天穗見命及土師宿禰を合祠す、此緣起は正保年間僧信林なるもの筑紫太宰府にあ



當世おじぎの仕方（學生）

りて靈夢に感じ、飛梅を以て新に神像を造り、江戸に上り淨地を卜して、こゝに天滿宮を勸請すといふ、社前に池を穿ち太鼓橋を架し、池上紫白の藤花、逆に水に映じ、上下並に奇觀を爲す、詩あり曰く『華嚴界裏酌二新醅一。肯許些兒著二點埃一。藤架風搖雲色紫。恍疑菩薩現二身來一』（南洋）初夏の頃都下群集す。

藤花の後に觀覽たるべきは花菖蒲なり、江東の一勝地堀切は夙に花菖蒲を以て名あり、これは享和文化の頃小高伊右衛門なるもの、性頗る植物を愛し殊に意を花菖蒲に注ぎ新種を汎く蒐集し奇花を得て蕃殖を謀りしかば、今日の盛況を致せり、維新前尾張大納言遊覽の



當世おじぎの仕方（老人）

折、日本一菖蒲と親書を賜り、維新の際には麻布龍土に花菖蒲に名ある松下左金吾の秘花を悉皆讓り受けたりとなん、當時武藏屋、植木屋二軒に夥多の花を培養せり、都人遠路を厭はず此村に杖を曳くもの多し。



當世おじぎの仕方（奥様）

五月中の植物

棕梠竹、竹、蘇鐵　初旬より日影棚に出し置くべし、枝葉の新陳交代を去るの外猥りに鋏を用ゆべからず

蘭　初旬より日影棚に取り出すべし此月植替によろし、其植替法は前々號「四月中の植物」に詳し

櫻草　五月上旬が眞盛なり

牡丹　開花は中旬に終れば下旬に至らば、盆栽及地植とも本年生長せし新枝の勢力最も盛なるもの二三節を置き其他は折り取るべし

芍藥　は下旬まで觀賞す

藤　上旬より生咲にて續々開花し、盆栽は花謝するの後結實の觀賞も雅致あるものなり

松　初旬より地植のものは新綠を摘む、さて其摘みかたは便宜の箇所より容易に爪にて摘み取ることを得るなり

歌苑

、花盛　沼津　まゝと女

雲とみえ雪とまがひて春風に匂ふは山の櫻なりけり

。野菫　同

春の野に匂ふ菫の紫に
つめる袂も染てける哉

。田家　同

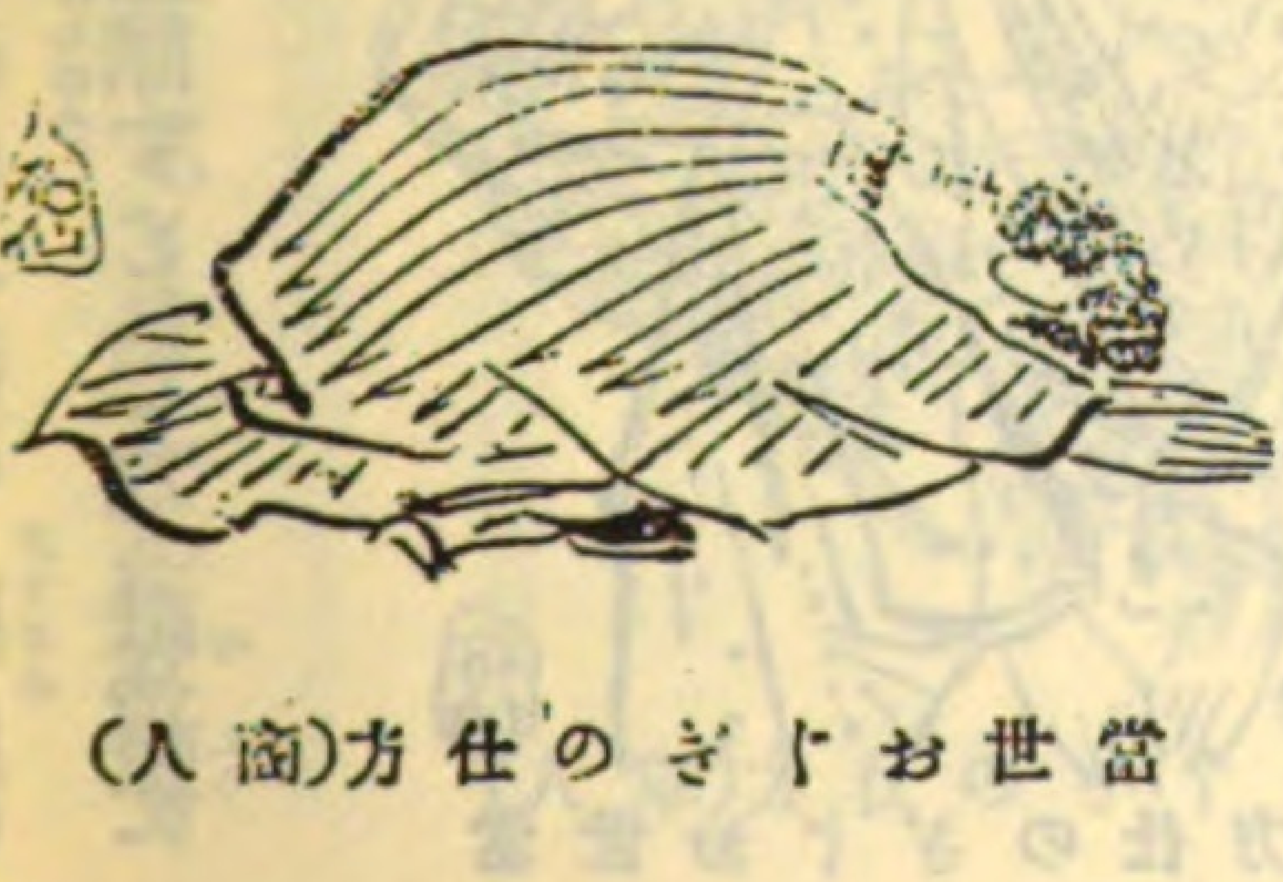
世のうきを厭ふ人こそ來てすまめ
いともしつけき小山田の家

、。花盛　村瀨のぶ子

昨日までのこりし下枝咲きそひて
今日こそ花のさかりなりけれ

○野菫　同

我のみと思ひし物をこの野邊に
はやもすみれをつむ人やたれ



當世おじぎの仕方（商人）

。。暮春　同

人ならは今暫しとも留めんに暮行春は如何にしてまし

評　旨新らし

、、、花盛　能登川　大橋　倘保

雪とのみ今を盛りに咲みたれ雲井にまかふ山櫻かな

、。花盛　静岡　紫文

背負ふ子か豆飼はんとてよふ鳩の羽音もいとふ花さかりかな

評　おもしろし

いさけふは花の木蔭に宿からん明日は雪とそふるへかりけり

評　結句わろし

野菫　同

。今宵こそ春の野守に宿からめ月も菫の道になれつゝ

、、あくかれて小蝶おふ子も心せり妹かゆかりの花の菫は

評　三句なつかしからす調のあしきはよみあぢはひてさとるべし

、。暮春　同

行水に流るゝ花はせかんにも止め方なき春を如何せん

評　めでたし

、、田家　同

家のとを廻る小川の岸におふる花の木蔭に衣洗ふ見ゆ



當世おゞぎの仕方（職人）

評　初二句なつかしけれど三句以下猶あるべし

野すみれ　上毛　中島　やす

。乙女子か袖振はへて路のへに飽ぬゆかりに菫をそつむ

、。思ふどちあそふ春野のすみれ草うす紫の色もむつまし

、。暮春　同

散り殘る花の梢にきこゆなり春を惜めるうぐひすの聲

花盛　上毛　六合の舍

櫻花さきのさかりは昨日今日見による人も盛なりけり

評　かく句はなれて同じ文字あるはわろし

、田家　同

稀人の稀に來つれは木の芽煮て厚くもてなす賤か庵哉

。暮春　同

春もはや更にけらしな我宿の垣根のふきに花はほうけぬ

、、、野菫　在阪　佐藤　渦心

少女子が日毎に摘めど中々に盡きぬは野邊の菫なり鳬

評　趣向おもしろけれど三句の用ひさまわろし

、。暮春　同

昨日迄花にたはれし園の蝶青葉に移る春の暮哉

評　下句よし

、、、花盛　小林玉川上

たちかくす霞の袖のよそにまて盛知らるゝやま櫻かな



當世おゞぎの仕方（藝人）

。。暮春　同

くれて行春のかきりも知られけり櫻流るゝせきの藤川

評 やすらかなり

、、暮春　林　香風　上

吉野川散てなかるゝ花見れはくれ行春の程そ知らるゝ

、花盛　同

散もせすつほめる花もなきまてに咲揃ひたる山櫻かな

野菫　月廼舎きよら

むかし我妹とすみれの花さきぬ
野とうつりゆく野にもならはで

評 下句おもしろけれど初句かの賀茂翁の名歌に似たるはわろし

。盛花　同

吉野山峯にも尾にも白くもの
かゝるや花のさかりなるらん

、。さくら島今やさかりになりぬらん波まに浮ふ花の白雲

評 をかし

。。暮春　同

峯もをも花の影さへなかりけり何處を指て春の行けん

、。ちる花と共に流れて行く春をせきとゝむへき柵もかな



當世おとぎの仕方（殘樣）

評 おもしろし

、、、田家　同

落穂拾ふ小鳥と共にあさ夕を小田の假庵に送りぬる哉

。。蝴蝶　同

うら／＼かすむ朝ほらけ　つゆをふくめる花かけに
たか身となれる夢を見て　あはれに蝶のねふるらん

評 三四句おもしろし

、。。花盛　東京　富志瀞寶

見渡せは峯にも尾にも白雲の懸るを花の盛といふらむ

評 いひかけは所によりてなつかしきものなれどこの四句のは耳たゝずしてよしこたびの投書の中の秀逸

。野菫　同

けふも亦獨り菫の花むしろしきても野邊に暮しける哉

。暮春　同

暫らくはちりにし花の名殘とぞ見つる梢の春ふけに鳧

、、、田家　同

苗代に水せきいれて思ふとなけにも見ゆる小田の丈夫

評 歌はよろしけれど題意にそむけり吾人亦さ改むべし

社告

次號歌苑欄三十一文字課題は
夕時鳥。梅雨久。海邊雨。述懷。

五月　家庭雜誌社

明治廿五年九月十四日遞信省認可

東京市京橋區西紺屋町廿六七番地株式會社秀英舍印行